# こども環境学会第 11 回合同セミナー（北陸・関西・東海）
# 研究発表・活動報告梗概集

テーマ：考えよう こどもが触れる自然と環境

日時： 2024 年 9 月 7 日（土）― 9 月 8 日（日）

会場： 金沢星稜大学

Summaries of the 11th Annual Joint Seminar Conference
of Association for Children’s Environment

Think about It — The Importance of Nature and Environment in Children’s Development

7-8 September 2024

Kanazawa Seiryo University

# こども環境学会第 11 回合同セミナー（北陸・関西・東海）
# 研究発表・活動報告梗概集

テーマ：考えよう こどもが触れる自然と環境
日時： 2024 年 9 月 7 日（土）―9 月 8 日（日）
会場： 金沢星稜大学

Summaries of the 11th Annual Joint Seminar Conference
of Association for Children’s Environment

Think about It — The Importance of Nature and Environment in Children’s Development
7-8 September 2024
Kanazawa Seiryo University

# 目次

Ⅰ　こども環境学会第 11 回合同セミナー（北陸・関西・東海）プログラム　1
　1．開催テーマ
　2．開催日程
　3．会場案内

Ⅱ　研究発表・活動報告会　2
　1．タイムテーブル
　2．研究発表・活動報告

Ⅲ　公開講演会　25
　1．概要
　2．講演者プロフィール

Ⅳ　ワンコイン・ワークショップツアー（こどもと楽しむ手作り活動）　26
　1．概要
　2．活動の内容

Ⅴ　資料　27
　1．お知らせ

Ⅵ　運営組織　28
　1．開催委員会
　2．実行委員会
　3．編集委員会
　4．共催・後援・協力

# Ⅰ　こども環境学会第 11 回合同セミナー（北陸・関西・東海）プログラム

## 1. 開催テーマ

「考えよう こどもが触れる自然と環境」

## 2. 開催日程

2024 年 9 月 7 日（土）-8 日（日）

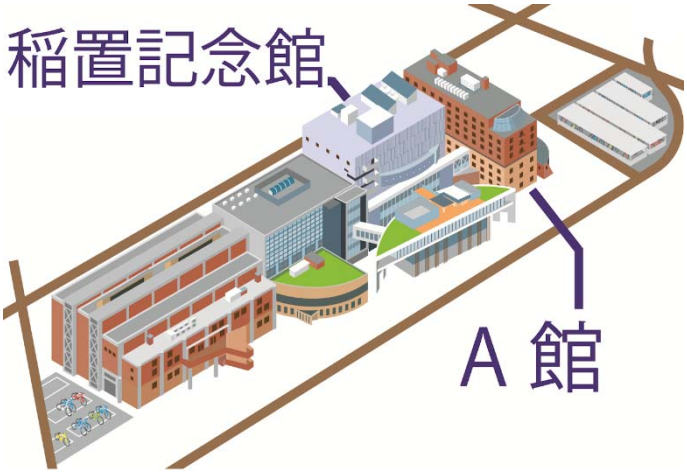
| | 時間 | 内容 | 会場 |
|---|---|---|---|
| 9 月 7 日（土） | 12:00- | 開場・受付開始 | A 館2階 |
| | 13:00-13:10 | 開会挨拶 | A23 教室 |
| | 13:10-15:20 | 研究発表・活動報告会 | A23 教室　A24 教室 |
| | 15:30-17:00 | 公開講演会：<br>ボルネオの熱帯雨林と私たちの暮らし | A21 教室 |
| | 18:30-19:30 | 情報交換会 | 大樋呑場ヤマハゼ |
| 9 月 8 日（日） | 9:00 | 開場・受付開始 | 稲置記念館（B 館）1F |
| | 9:30-12:00 | ワークショップツアー | |
| | 9:30-11:00 | ガラスワーク | 造形工房 |
| | 10:15-11:45 | おさかなワーク | クッキング工房 |
| | 9:30-11:45 | マイペースワーク | 遊び工房・表現工房 |
| | 10:00-12:00 | モビール作家の展示 | 遊び工房・表現工房 |

## 3. 会場案内

金沢星稜大学　〒920-8620 石川県金沢市御所町丑 10 番地1

アクセス

・金沢駅前（東口）4 番のりばより、西日本 JR バス　東長江行き「星稜高校」下車徒歩 1 分、または「御所口」下車徒歩 5 分
・金沢駅前（東口）6 番のりばより、北鉄バス[82][88]柳橋行き「鳴和」下車徒歩 10 分
・東金沢駅東口より徒歩 20 分




＊両日ともに学内食堂・コンビニエンスストアは営業していません
　A 館 3F 学生ホールの飲物の自販機は利用可能です

# Ⅱ　研究発表・活動報告会

## 1．タイムテーブル

| 時間 | A23 教室 | A24 教室 |
|---|---|---|
| | 座長　藤田　大輔（豊橋技術科学大学） | 座長　大西　宏治（富山大学） |
| 13:00-13:10 | 開会挨拶<br>永坂正夫（金沢星稜大学） | |
| 13:10-13:25 | A23-1<br>保育学生の自然環境保護意識 —『オランちゃんへのやくそく』の活用 —<br>三好　伸子（金沢星稜大学人間科学部） | A24-1<br>「星稜ジャンプ地域活動プロジェクト」による子ども対象のイベント企画 —4 年間の活動を振り返り—<br>天野　佐知子（金沢星稜大学） |
| 13:30-13:45 | A23-2<br>イラストイメージに見る環境意識の世代間比較 —能美海岸に対する三世代アンケート調査の結果から—<br>山本　輝太郎・牧野　耀・永坂　正夫・岸本　秀一（金沢星稜大学） | A24-2<br>活動報告：出張子ども食堂「カレー＆ボドゲ会」 —他団体との連携を通した子どもの居場所づくり—<br>多橋　和輝（金沢大学大学院生） |
| 13:50-14:05 | A23-3<br>児童厚生員・放課後児童支援員のまなざし —七尾市高階放課後児童クラブでの被災地こども居場所支援を通じて—<br>山口　直人（社会福祉法人積慶園　京都市桂徳児童館） | A24-3<br>域住民と子どものためのアート空間プロジェクト —遊楽ソウの可能性 —<br>池上　奨（STONE ARTIST　金沢星稜大学非常勤講師） |
| 14:05-14:15 | 休憩 | 休憩 |
| 14:15-14:30 | A23-4<br>夫婦の送迎を含んだ通勤行動の比較 —東京大都市圏を事例に—<br>佐藤　将（金沢星稜大学経済学部） | A24-4<br>外で遊んで大きくなるということ再考 —遊び環境生活環境におけるアロングサイダーの存在を核として—<br>菊地　知子（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所研究協力員） |
| 14:35-14:50 | A23-5<br>子どもを中心とした保護者・地域社会・保育者育成の巻き込み型保育 —能登復興支援の夏祭り及び卒園児交流の場の事例を通して—<br>藤井　千里（金沢泉丘こども園） | A24-5<br>子どもの可能性を育てる STEAM プログラミング教育 —幼児教育におけるプログラミング教育の必要性と可能性—<br>細谷　貴章（株式会社ワンダーアカデミア） |
| 14:55-15:10 | A24-6<br>遊びか練習か —先史時代の考古遺物から考える子どもの模倣行為—<br>織田　将徳（金沢大学大学院人間社会環境研究科　博士前期課程） | A24-6<br>農の風景と食の味わい、子どもで賑わう山村古民家にて<br>富樫　豊（北陸こども環境研究会） |
| 15:10-15:20 | 講評 | 講評 |

## ２. 研究発表・活動報告

研究発表(A23-1 - A23-6)　　p.5 - p.14

活動報告(A25-1 - A25 6)　　p.15 - p.23

A23−1

# 保育学生の自然環境保護意識
## ―『オランちゃんへのやくそく』の活用 ―

三好　伸子（金沢星稜大学人間科学部）

### はじめに　問題の所在

保育学生は、環境問題をどのように捉えているのだろうか。ボルネオの自然環境問題を描いた絵本を読む学生の意識に目を向けて考えたい。

環境とは「主体と何らかの相互作用をもち、しかも直接は主体の制御下におかれていないその周辺」であり、「人間社会の外界である自然について、それが人間社会の環境であることを強調しつつ認識を深める教育が必要」[1]と環境教育事典（1999）に示されている。

0歳児からの環境教育の重要性を述べている井上（2012）は、環境という言葉を以下のように説明している。環境は、「明治以降、environment という英語の訳語として」、「生物学用語として」出発し、「大正から昭和にかけて、環境は生物学の学問用語として確立した一方で、一般の言葉としても使われ始め」その後、「生物としての子ども」、「被教育者である子どもを取り巻く外界を示すように」なり、「境遇や家庭環境のような社会的環境が重視され」、「教育学独自の概念として定着していった。」保育学においては、「フレーベルの『人間の教育』（1925）で『自然および環境の観察』という訳が与えられ」、工場内に幼児学校を設立したオーウェン（1771-1858）は、「環境によって人間は変えられる」と示し、モンテッソーリ（1870-1952）は、「保育環境が子どもにとって重要」と主張した。この3者の声などが、子どもにとっての環境の重要性を20世紀の教育学につなげた。

日本においては、倉橋惣三（1882-1955）が『幼児の心理と教育』（1931）で「生活の全体が、広い教育的環境の中に置かれるという意味に他ならぬ。従って幼児期教育には環境を大切とするのである」と示した。倉橋の主張した保育の環境の考え方が、「学校教育法」の「適当な環境を与えて」という表現につながったとし、保育者の「環境構成」という狭義の理解が今日まで続いていると井上（2012）は論考している。世界に目を向けると、「1980 年というと、環境という言葉が『現代用語』として確立し、環境教育が『古典的な環境教育』の時代を脱し、持続可能な開発（SD）概念にむかい始めた頃」である。しかし、「フレーベルと倉橋の理想を受け継いだはずの日本の保育だが、その公式なガイドラインの歴史をみるかぎり、自然はあくまでも子どもに科学性を芽生えさせ、人間性を涵養するための素材、子どもを取り巻く保育環境のなかのただの一要素、一部分に過ぎなかった。これは現在の保育でも同様」と述べている。日本の保育における自然環境教育への取り組みの遅さを指摘している[2]。

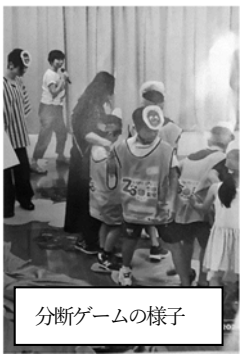
自然環境を保育環境の一要素としながら日本の保育・教育は、「新自由主義」の時代に突入した。社会の急激な変化の中で子どもたちの声を聴く援助の必要性を説く田中（2009）は、新自由主義について「資本の利潤蓄積の『自由』を第一義に追及し、『競争』こと社会と人間の活力であり、『競争』に勝つか負けるかは参加者の『自己責任』である」[3]と述べている。現在、筆者が接している大学生らは、就労、医療、福祉、教育などの生活の不安定感があふれた社会環境で育った（またはその中で育った親の子ども）らであり、「Z 世代」と呼ばれている。

加えて彼らは、デジタル・ネイティヴである。自分が欲しい情報を苦労なく取捨選択する技術と意識を持っている。前述したように、環境教育でいう環境は、動物や植物の環境ではなくて、「人間社会の環境」であり、主体は人間である。大学生は、主体として何を「環境」として取捨選択するのだろうか。大学生が、地球規模の自然破壊問題を主体として考え、自然保護意識を抱く保育者養成を目指すことが急務であると考える。

### 1　仮説

学生ら個人の周囲の環境の捉えから、地球の自然環境問題に目を向ける工夫が必要である。

筆者はこれまでその工夫として、絵本『オランちゃんへのやくそく』[4]を活用して読み合ったり、「分断ゲーム」*)やパームオイルの調査などを学生と演習したりしてきた。しかし、近年の学生にボルネオの森林破壊の教材案を問うと、VR、SNS、ゲーム式のアプリの活用などが挙がる。その姿から、絵本だけの教材力が弱くなっているのではないかと考えている。学生が環境教育を促す絵本の有効性に執着する筆者に忖度する結果ではなく、学生の個人的な感覚や意識に焦点を当てて絵本『オランちゃんへのやくそく』の活用方法を一人の学生と見直していきたいと考える。


分断ゲームの様子

本研究では、絵本の1ページずつの内容を学生の捉えの実際と照らしていく読み合いを試みる。学生が環境教育教材としての絵本の活用方法を主体的に考えることにより、保育学生の自然環境保護意識が涵養されていくと仮説を立てる。

### 2　分析の視点

□村中（2021）の読み合いの実践を分析の視点の参考にする。絵本の読み合いは、読み手が一方的に絵本を読む「読み聞かせ」とは異なり、「考え方を一方向へ導いたり、望ましい人格への変貌を目指すことなく、物語の力を借りながら人と人として感情を響き合わせて」[5]いく特

徴をもつ。村中の実践では、受刑者となった母親が我が子のために絵本を朗読して送る実践がある。受刑者同士の読み合いを通して、母親自身が自己理解をするという潜まれた目的に迫る様子や、受刑者同士が同じ目的に向かって自然と励まし合う姿が明らかにされている。

村中の実践を参考に、本調査対象者の学生と筆者が、同じ目的をもって絵本の読みあいを行うことにした。同じ目的は、子どもの前で、本絵本を紹介して、環境教育を行う方法を探ることである。読みあいをする場における筆者との仲間意識を抱き、筆者との自然な励まし合いがなされ、学生の素直な意識が現れるように試みる。学生は、自己の自然環境保護意識や、ボルネオに対する興味の深さを自己理解すると考える。さらにどのページが感動を与えるのか、子どもに説明が必要かなどを明確にすることで、絵本活用のヒントを得るか、絵本以外の伝え方を考えると期待する。以上の読み合いの特徴を分析の視点とする。

## ４　目的

保育学生との絵本『オランちゃんへのやくそく』の読み合いにより、学生の自然環境保護意識を明らかにすることを目的とする。

## ５　対象

研究対象者は、決まった子どもを対象として絵本を読む活動を筆者と継続して行っている学生Ｘさんである。Ｘさんは、1 年次の授業で本絵本を読んでいるが、その点について、筆者から話さず、Ｘさんが話したら聞くようにする。本調査目的及び、匿名性などを説明して同意を得て本学において 202X 年度に調査を行った。

## ６　方法

調査時間は 60 分である。まず、Ｘさんに改めて調査目的等を説明して、以下の手順で進める。①『オランちゃんへのやくそく』を見てシートの質問（1）に答える。②シートの質問（２～３）に答える。③用紙に書いた感想を基に話す。④シートの質問（４）に答える。筆者と話す。調査の初めと終わりに、調査に対する感想を聞く。1～4 のシート記述、及び読み合い場面の観察から学生の意識を考察する。シートの質問は以下である。

＊調査の初めと終わりに感想を教えてください。
1　各ページに対して、気づきや感想を短く書いてください。
2　最後まで見て、印象に残ったページとその理由を書いてください。
3　印象に残った登場人物とその理由を書いてください。
4　子どもに伝えたいことと方法などを提案してください。

## ７　結果

Ｘさんは、調査の初めの気持ちを「一回読んだことあるけど、1 行ごとに感想が思いつくか心配」と話した。調査中は、絵本の絵を見るより、話を思い出すように文章を書くことに集中する姿が見られた。以下は、シートの「4　子どもに伝えたいことと方法などを提案」の記述である。

・12，13 ページの絵本以外のパーム油の用途の他の例を出したら、子どもたちが「えー？」と驚くと思う。
・17，19 ページのパームツリーの「増やしすぎ」の場面では大げさに感情をこめて読み、オランちゃんへの影響や悲しみを伝える。

Ｘさんは、パーム油の使用に無頓着である現状を指摘して、「菓子の情報」等、絵本以外の情報の追加や、「悲しそうに読む」などの感情移入効果を方法として挙げた。筆者が「伝わるかなぁ？」と相談を持ちかけるように問うと、「劇は？」「子どもたちの先生を物語に登場させては？」と子どもがより身近に感じられる工夫を話した。また、「〇〇マンがボルネオに行く」のなどの「アニメを作っては？」と、子どもが好きな商品キャラクターの企業提携を提案した。

またＸさんは、「印象に残った登場人物」を「人間」とした。「オランちゃんの住処を奪う環境によくない行動と、わかっていてもパーム油が必要だから仕方ない行動という人間は両方の行動をしている」と解決の難しさを述べた。「私も 1 年生の時に初めて知ったから、絵本でこの問題を知っていく人が増えるといいと思う」と話したが、「絵本で問題はわかるけど、どうしたらいいのかは世界規模って感じでわからない」と述べた。また、オランウータンの母子関係についても、Ｘさんの考えを聞くことができ、絵本の読み合いを続けることを励まし合う姿も見られた。

## ８　考察

読み合いは、教員と学生等の立場を離れ、同じ問題解決を考える仲間として絵本について話す感覚が生まれることを再確認した。

Ｘさんは、子どもたちに「より具体的に、身近に」とリアルな問題意識を伝えようとしていた。また、1 年生の時に絵本で知っていても実感を伴わない自己の環境保護意識や、芽生え状態のまま放置された意識の期間に気づく姿から、「解決がわからない」「人間は本当に約束できるのか」と疑問の意識が確認された。伝えたい気持ちと方法の模索の必要性が意識として見えてきた。

## おわりに

筆者も、絵本の読み手の意識の涵養を待ちすぎていたとＸさんと同じ思いをもった。単に絵本の読み合いを繰り返すだけでなく、内容を再考して保育学生の提案する SNS を活用したり、互いの感情を響き合わせるゲーム式のアプリ等の絵本の多様な活用方法を試したりして、積極的に環境保護意識を揺さぶり、意識の深まりを探ることを今後の継続課題としたい。

---

[1] 環境教育事典編集委員会『新版環境教育事典』1999　旬報社　p.69.74
[2] 井上美智子『幼児期からの環境教育―持続可能な社会に向けて環境観を育てる』昭和堂　2012　p.38、60，92、93.
[3] 田中孝彦『子ども理解―臨床教育学の試み』2009　岩波書店　p.1
[4] 三好伸子/作『オランちゃんへのやくそく』2018　甲南女子大学学生プロジェクト応援基金
[5] 『女性受刑者とわが子をつなぐ絵本の読み合い』村中梨衣/編著　中島学/著　2021　かもがわ出版 p.13.
＊　写真は、BCHJ 事務局発行「BCTJ 通信 vol.25 ボルネオの風」2024 p.7 に紹介されている「生息地分断ゲーム」を行う池田康子さんです。2024 年 2 月 8 日に逝去された池田康子さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

A23-2

# イラストイメージに見る環境意識の世代間比較
## ―能美海岸に対する三世代アンケート調査の結果から―

○山本輝太郎（金沢星稜大学），牧野耀（金沢星稜大学），永坂正夫（金沢星稜大学），岸本秀一（金沢星稜大学）

### Ⅰ．調査全体の概要

本報告では石川県能美市の住民を対象に，当該海岸に対する環境意識についてのアンケート調査の結果について，特に自由記述のイラストイメージに焦点をあてた考察を行う。当該調査は能美海岸の環境意識や行動の向上を目的とするものとして，当該地域に子世代，親世代，祖父母世代といった三世代を対象として実施した。具体的には，能美海岸への環境意識を問う質問群（計22問）および過去，現在，未来という三軸の能美海岸に対する思いやイメージを自由記述で書いてもらう形でのアンケートを実施した。対象は能美市内にある浜小学校，福岡小学校の高学年（4-6年生），根上中学校の1-3年生および当該児童・生徒の親・祖父母であり，欠損データなどを除いた最終有効回答者数は1001人であった（下表1）。祖父母世代においては，平均的に50年以上能美市に居住していた。アンケートの各項目の詳細については山本ほか（2023）や牧野ほか（2024）などを参照されたいが，全体としては先行研究に基づき構成した質問項目において，すべての因子間に一定の相関がみられたうえで，子・祖父母世代に比べて親世代の平均値が有意に低かった。

表1　アンケート回答者のデモグラフィック情報

| | 子世代 | 親世代 | 祖父母世代 |
|---|---|---|---|
| 人数 | 473人 | 413人 | 115人 |
| 性別 | | | |
| 男 | 230人 | 131人 | 49人 |
| 女 | 235人 | 272人 | 65人 |
| 未回答 | 8人 | 10人 | 1人 |
| 平均年齢<br>[SD] | 12.7歳<br>[4.25] | 43.8歳<br>[5.61] | 72.0歳<br>[5.48] |
| 平均居住年数<br>[SD] | 11.91年<br>[3.50] | 26.40年<br>[14.17] | 59.35年<br>[17.88] |

### Ⅱ．自由記述のイラストイメージにみる環境意識

前述のように本研究では，「過去」「現在」「未来」という三地点における能美海岸環境イメージについて，自由記述での回答を求めた。具体的には「子どもだった頃の能美の海岸に対するあなたのイメージ（親，祖父母世代のみ），現在のイメージ，将来こうなっていたらいいなと思うイメージを自由にお書きください」としたうえで，言葉だけでなく，イラストなどでも表現可能とした。

イラスト内容について複数の研究協力者らとのディスカッションをもとに考察した結果，どの世代でも，現在の能美海岸の様子をネガティブに捉えている一方，将来への期待や過去を懐かしむイメージが具現化されていた。また，特に祖父母世代において，過去の海岸と比較して，（ダムなどの影響によって）現在の海岸がやせ細っているようなイメージが描かれており，未来ではそうした現実の改善がなされているようなイメージが見受けられた。

一方，その改善方法については，現状を受け入れつつも科学・技術の進歩によって克服するような方向性と（図1），過去への回帰を求めるような方向性が見受けられた（図2）。子世代においては，「海」視点や「人」視点など，視点の異なる将来の繁栄への期待感が描かれていた一方，その手段については抽象的なイメージに留まっていた。

発表時は以上のようなイラストイメージの詳細を中心に報告する。

図1　科学の発展による現状改善を願うイメージ

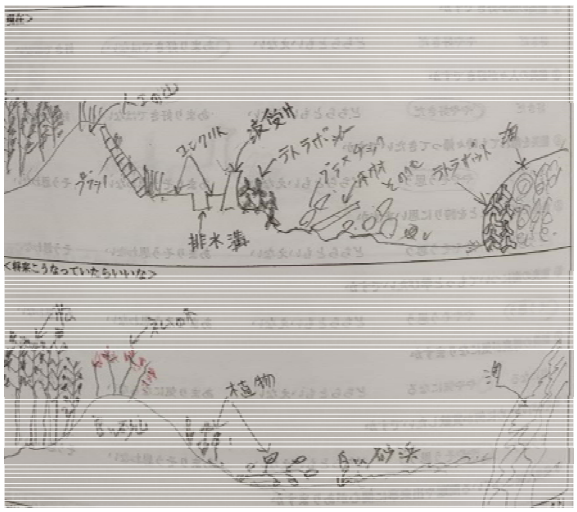



図2　過去への回帰による現状改善を願うイメージ

### 文献

山本輝太郎・牧野耀・永坂正夫・岸本秀一（2023）：「能美海岸の環境意識に対する三世代アンケート調査～海岸清掃を通した環境教育の拡充に向けて」『日本科学教育学会第48回年会論文集』

牧野耀・山本輝太郎・永坂正夫・岸本秀一（2024）：「能美海岸の清掃行動に影響を及ぼす要因分析：質問票調査に基づく探索的研究」『金沢星稜大学論集』，Vol.57，No.2，pp.55-66.

A23-3

# 児童厚生員・放課後児童支援員のまなざし
## ―七尾市高階放課後児童クラブでの被災地こども居場所支援を通じて―

山口 直人（社会福祉法人積慶園 京都市桂徳児童館）

**被災地でのこどもの居場所支援**

児童健全育成推進財団は能登半島地震の被災地へ人的支援と物的支援を行っている。人的支援のひとつが七尾市の放課後児童クラブへの専門スタッフ派遣である。高階放課後児童クラブへの派遣は①1/31～3/1 と②5/21～6/20 の二回行われ、計 36 日間、総勢 22 名のスタッフ（以下、支援員）が派遣された。

七尾市高階地区は能登半島の付け根、内陸に位置する。（図１）七尾市高階放課後児童クラブは高階地区コミュニティセンター（旧高階小学校、以下コミセン）にある。コミセンは震災を受け、避難所としても機能している。

**支援の視点**

今回、支援員らは通話・メールアプリによるオープンチャット機能を媒体として連絡を取り合い、活動記録もアプリ上で共有している。日々の報告・次回支援員への引継ぎのための活動記録をすべて網羅的に参照し、実際に専門スタッフとして派遣された一支援員の立場から分析を行う。特殊な状況下の記録ではあるが、支援員らのこどもへの視点を明らかにしたい。

**活動記録の整理、方法の検討**

活動記録は「記録者の所属と名前」「日付」「支援場所」「業務内容」「ニーズ等」によって構成される。整理にあたり、まず「ニーズ等」を「環境設定における留意事項」「こどものニーズ」「震災に関連すること」に分類した。しかし「環境設定における留意事項」と「こどものニーズ」とを分類することが困難だった。学童クラブの一日の内、主となる時間は、こどものじゆうあそびの時間である。これはこどもたちが過ごし方を決める時間なので、施設的な制限はありつつもこどものニーズそのものと言える。それに対応して支援員は環境設定を行うため、この二つの項目が不可分であることがわかった。

そこで、そもそもの記録の目的と児童クラブでの支援員の役割に立ち返り活動記録全体より「優先順位の高い遊びのニーズ」「集団についての申し送り事項」「災害関連の傾聴すべき内容」を抽出することとした。（図２）ここで優先順位の高い遊びのニーズとは支援員が強調して記録しているものである。例えば毎日の生活で頻度が高いだけの遊びはここに挙げられていない。

また、活動記録の理解のため[注1)] 添付された写真より児童クラブの現場の平面図を作成する。（図１）

**優先順位の高い遊びのニーズ：運動遊びの環境**

こどもたちは外遊びが好きだということが何度も共有されている。外で遊ぶことができない日も廊下で運動遊びしている。廊下には運動遊びが行われる前提でおもちゃが配置されており、平均台、一輪車、竹馬、キックボード、やわらかいボールなどが置かれているため、これは日常的なニーズだと考えられる。屋内の限られた空間でこれらの遊びが展開されることは支援員にとって必ず

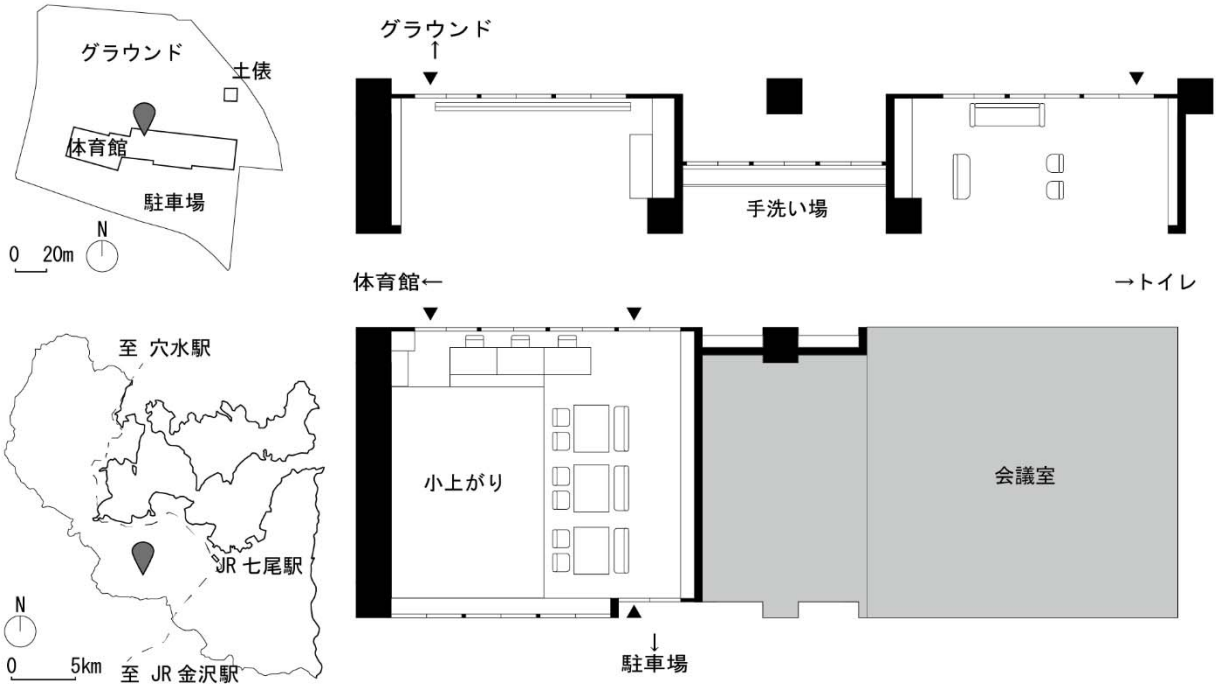



**図1 物理的環境（左下：高階地区の立地、左上：高階放課後児童クラブの立地、右：児童クラブ屋内平面図 1/200）**

しも一般的ではない。屋内でのこのような過ごし方に対して、他の集中できる遊びの提案ができるとよい、という記録もある。

**集団についての申し送り事項：特に集団の特徴について**

この項目はさらに「児童クラブの基本的な情報」「集団の特徴」「特徴的なこどもの様子」に整理される。

「集団の特徴」として、異年齢で仲良く遊んでいる様子が何度も共有されている。特に高学年が役割を持ち、場を仕切る機会があったり、低学年のトラブルの間に入る様子が見られたりする。また前項の運動遊びに関連して、遊びを考えている、自由な発想で遊ぶ、など記録されている。他二項目についてはここでは割愛する。

**災害関連の傾聴すべき内容**

支援員は研修を受講し、こどもから発せられる地震の話題や遊びに現れる地震というキーワードの奥にあるこどもの気持ちに細心の注意を払うことを心にとめ現場に入った。期間中に、そのようなこどもの表現に向き合う機会のなかった支援員もいたようだが、時折、現れている。支援中に余震が起きることもあった。

児童クラブがコミュニティセンター内にあるため、普段遊びに使っている体育館が使えなかったり、となりの部屋が避難所利用され廊下で遊ぶ際に気を使ったり、避難所にいる中学生が遊びに来たり、児童クラブも少なからず影響を受けていた。何より、児童クラブの職員の皆様方が被災者であり、それぞれの生活に震災の影響があるにも関わらず、それよりもこどもたちや彼らのご家庭のことを考えておられる姿に感銘を受けている支援員もいた。

**児童厚生員・放課後児童支援員のまなざし**

支援員ら 22 名のすべての活動記録を通じて、彼らの目を通した児童クラブでのこどもたちの姿を記述した。共通な記述には一定の妥当性があるだろう。

前回支援員からの引継ぎ記録があることは、上記の屋内での遊び環境設定を想定する上で非常に有効である。こどものニーズを踏まえ、それらが静止すべき遊びでないことを前提にこどもと関われるからである。

また、①の期間と②の期間のあいだでは、こどもたちの学年が上がっている。集団としてのこどもたちのすばらしさがどちらの期間でも共通しているのは、それが児童クラブに根付いているものであるといえるだろう。同時に、共通な記述が複数見られることからは、支援員ら側にも集団性を視る共通の視点が存在することも示唆される。

支援員らは、こどもたちがどのように遊ぶのが好きなのか、そして実際にどのように遊ぶことができているのかを見つめ、自分にできる支援を考える。そして同時に、被災地へ支援に入った支援員らは、遊ぶこどもたちの姿に自分自身も勇気づけられている。少なくとも筆者がそうだった。

本稿は、支援員らの記録の有用性も強調する。児童館・児童クラブ職員は日誌等への記録業務を日々行う。個別の支援を目的に記録を振り返ることもあるが、このような場合、今回は割愛したこどもの様子や、誰と何で遊んでいたか等の記録こそが参照される情報となる。余すことのない記録が日の目を浴びる機会はもっとあるべきだ。

**謝辞**

（一財）児童健全育成推進財団の皆様、共に支援を行った皆様、高階児童クラブの職員の皆様、そしてこどもたちに、この場を借りてお礼申し上げます。

注１） 加えて、児童クラブの一日の流れをここに記す。給食再開前：12 時頃こども到着、昼食→宿題→じゆうあそび→15 時頃おやつ→じゆうあそび→17 時頃おむかえまち（屋内で過ごす時間） 給食再開後：15 時頃から順次こども到着→宿題→屋内でじゆうあそび→全員帰って来たらおやつ→宿題・じゆうあそび→17 時頃おむかえまち

**優先順位の高い遊びのニーズ**

子どもたちは外で思い切り遊びたい／子どもたちは元気に遊びたい／子どもたちは外で遊ぶことが好きで、ほぼ外でケイドロで走り続けました。／外で遊ぶことができないため元気を持て余す／「今日は工作ないの？」と聞かれたので、紙とんぼの工作をしました。／廊下の狭いスペースでしか遊ぶことができない状態なので、雨天時は座ってできる遊びの提案ができるといいのではないか／子どもたちは体を動かして遊ぶのが大好きです！／晴れた日は外遊びのニーズが高い。／廊下のおにごっこでは、物陰からとびかかったりゾンビのように襲ったりすることを初日にしたのがおもしろかったらしく、ずっと求められている。／体を使った遊びがすごく楽しかったよう／クラブ室１つと少し広い廊下しかないので、雨の日の過ごし方に工夫が必要／今週初めての雪りだったので、グラウンドは少しぬかるんでいたが、みんな外遊びがしたいとグラウンドにでる。／子ども達はとにかく鬼ごっこ大好きです。最重要業務かもしれません。／体を動かすことが大好きです。／とにかく、子どもは体を動かしたり、走ったりする事がが大好き。／本当に体を動かすことが大好きです。

**集団についての申し送り事項：集団の特徴**

異年齢で仲良く遊んでいました。／子どもたちで遊びを考え、積極的に遊んでました。／人懐っこい子が多い／狭いところでも、工夫していて、昨日とは違う鬼ごっこをしたりもしていますが、竹馬と同じスペースなので、ちょっと危ない感じもします。現場の先生方も見守っている状態／上級生がうまく分けてくれていて、いいなぁと思いました。／高学年の役割が自然とある児童クラブ／少人数で本当に家庭的な自由に過ごせるクラブ／子供たちが自由な発想で遊ぶ／子ども達はやんちゃで遊びと人との関わりに飢えている感じがしました。／とても人懐っこく／とにかく体を動かすことが大好きな子が多く、廊下はもちろん、体育館でもいろんな遊びをして楽しんでいました。／廊下、体育館、グラウンドでその日によって子ども達が自由にいろいろな遊びをしているそうです。／子どもたちは、活動的で受け入れ慣れか？人懐こかった。／人懐っこい子が多く、初対面でもスムーズに受け入れられた／「先生」呼びで統一してはいないとのことでしたので、子どもたちには好きなあだ名で呼んでもらいました。／遊びが始まる前に発案した子が声をかけると毎回ほぼ全員が同じ遊びに参加していました。／廊下を走るボールを使っていたりキックボードで走っていたり、狭いスペースで遊びが混在するので注意が必要／遊びがコロコロ変わるがほぼ全員が参加する。／低学年は嫌なことを言ったり意地悪をする様子もありますが、高学年が間に入ってくれたり、まとめてくれたり、思いやりのある行動がたくさん見られました／時折、こどもたち同士の関わりの中で、強い言葉をつかうこともあるが上の学年の子たちが声を掛け合ってバランスを取ろうとしている様子が見受けられた。／外あそびの時に低学年が遊んではいけないところに行ってしまったときに、高学年が注意してくれて、異学年交流ができているな、と感じました。

**災害関連の傾聴すべき内容**

同じ階に避難されてる方がいるので静かにと伝えても大きな声ではしゃいだりします／中学生が遊びに来ました。施設内の避難所にいる子。／子どもたちからも地震の話が聞かれました。自分のうちは大丈夫だったけど、瓦が落ちた家もあるし、潰れた家もある震度７経験したことある？といった感じです。／竹馬を揺らしてと頼まれて揺らすと、「じしんだーー！」と大きな声をあげたりもしていました。／先生方も被災していながらお仕事をされている状況なのだと改めて大変さに気付かされました。そんな状況でも、子どもたちは元気に遊んでいるけど、きっといろいろ抱えているだろうとか、うちはまだいい方だからと子どもたちや他の方の心配をされていて、／震災以降、保護者のお迎えが早い。こどもがお願いしているよう。こどもの中にはまだまだ恐怖がある。／職員さんも急な大きな音や揺れはまだ怖い。こどもと話す際は「大丈夫だよ」等と安易に怖さを跳ねのけず、「そうだね怖かったね、先生もこわかった」など共感する／昨日は一旦こどもの居場所として使えた隣室がまた避難場所に戻っていた。廊下でこどもが騒ぐのは一応 OK のようだった。／毎日、震度３程度が揺れている。記録を忘れていたが、昨日も保育中に揺れた。全員が素早く机の下に潜る。大きな揺れを体験しているので、少しでも揺れると緊張感がある。／元旦の日に京都や和歌山は揺れたのか、どんな様子だったのか、質問された。／避難所の共用スペースにバレンタインの手作りチョコを置いておいたら誰かに食べられてしまったと話す。／人数が少なくなると、ポツリと地震のことを話す子がいます。一年後にまたくるんやろ？とも言ってました。／こどもが「地震だ！」と言って家を壊したり、「家を直しました」といって組み立てなおしたりを繰り返している。先生は「みんなで作ったダンボールの家を大事にしなくちゃいけないよ」と繰り返し声かけをする／教室の写真を見ながら、自分や家族、友達のことをいっぱい話してくれました。地震のことを話していた子どももいます。／地震の話が少し出てきましたが、話し出してすぐお迎えに来られたので中断／こどもたちから震災のことについてお話をする場面はほとんど見られませんでした。／支援員の方たちとは、震災の話はしたが、子どもたちからは一切出ませんでした。／今日は子どもから、震災の話が出た。「リホームしたばかりのお家が地震で潰れちゃって、支払うお金だけが残っちゃて、あ～あ、又ペットで寝たいな～」と話してきた。その言葉に対して「そうだね。あたたかいペットで寝たいね」と共感すると、落ち着いた様子を見せた。

**図2 抽出した項目のエピソード一覧（掲載にあたり一部、主語を修正している）**

A23-4

# 夫婦の送迎を含んだ通勤行動の比較

## ―東京大都市圏を事例に―

佐藤将（金沢星稜大学経済学部）

### 研究の背景と目的

子育て世帯の保育所送迎を含んだ通勤行動において自宅から保育所への送迎をそのまま勤務先に向かうルート上では、勤務先の始業時間と保育所の送迎可能時間との兼ね合いから、都心部へのフルタイム就業を可能とする者は限られてくることが指摘されている（宮澤 1998）。しかし共働き世帯の増加によって保育所の拡充が行われてきたことを背景として、保育所送迎への制約条件に変化が生じることが考えられる。これを受けて佐藤・後藤（2019）は 2008 年のパーソントリップ調査データを基にした人と流れデータを用いて、佐藤（2023）は 2018 年の東京都市圏 ACT を用いて、妻を対象とした子育て世帯の日常的な保育所送迎を含んだ通勤行動の特徴の検証を行っている。一方でコロナ禍以降の送迎行動の特徴や近年、育児協力の担い手として注目されている夫の保育所送迎についての分析が不足しており検証の余地が残る。

そこで本研究ではアンケート調査に基づいてコロナ禍以降の保育所送迎を含んだ通勤行動について夫婦それぞれの特徴について検討する。

### アンケート調査データについて

本研究の調査で用いるアンケート調査について説明する。QiQUMO のセルフアンケートツールを用いて 2023 年 3 月に Web アンケート調査を実施した。調査対象者は茨城県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県の 1 都 4 県に在住の者とし、夫の年齢層は20～40 代とし、妻は20～30 代とした。このアンケートでは夫・妻それぞれ 500 人の回答を得た。このうち①夫婦と子どもから成る世帯に属し、②子どもが 1 人以上いて、③最年少の子どもが 5 歳未満であり、④育休中の就業者を除いたフルタイムないしはパートタイムの仕事に従事している者、⑤保育送迎を行っている者、の 5 つの属性に該当する夫は 53 名、妻は 185 名を抽出した。

妻の就業については 120 名と全体のうちの約 3 分の 2 程度が正社員もしくは技術専門職である。夫に関しては 53 名全員がフルタイム就業者であり、在宅勤務者も 4 名と僅かながらに存在するが、そのほとんどがオフィス出社をメインとしており、夫婦いずれもフルタイム就業者がメインである。

### 妻の移動パターンの特徴

まず妻については図 1 に示した保育所送迎を含んだ通勤行動の移動パターンのうちでどれが多いかを検討した。その結果、A パターンが過半数以上と最も多いことがわかった（表 1）。このアンケート回答者における妻の特徴として見送り・お迎えともに妻自身が保育送迎を担っていることがわかった。

### 夫妻の通勤時間の特徴

これを踏まえて次に妻に関しては A パターンと今回のアンケート調査で調査対象者として抽出した者全体を、夫については調査対象者全体における通勤時間との比較を行った。

妻の移動パターン別での差異は見られなかったものの、夫の妻の間で通勤時間の違いが見られたのでこの点にて報告する。通勤時間が 30 分以内の者の割合は妻が 54.7%と過半数を超えるのに対して、夫は 30.2%と妻の方が短時間通勤は多く、従来の研究でも言われている通り、通勤時間の短さによって朝夕の保育送迎を可能としていることがわかった。

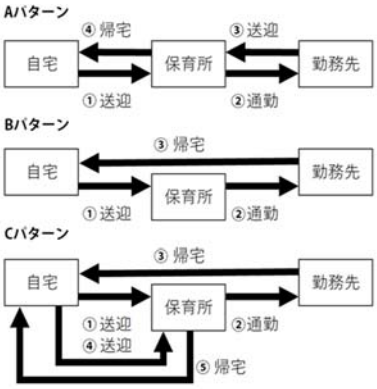



図1　自宅⇔保育所⇔勤務先間の妻の移動パターン

表1　妻の移動パターン別の対象者数

| 類型 | アンケート調査 |
|---|---|
| Aパターン | 126 |
| Bパターン | 23 |
| Cパターン | 13 |
| その他 | 23 |
| 総計 | 185 |

図 2　夫婦間での保育送迎の分担状況

### 夫婦間での保育送迎の分担状況

最後に夫婦間での保育送迎の分担状況について報告する。図 2 が分担状況を整理したものである。結果を見ていくと、多くの母親がお見送り・お迎えともに自分自身で行っている者が 6 割程度と多くいることがわかる。そのため、依然として母親の負担が大きいことが明らかとなった。

### 謝辞

本研究は JSPS 科研費（若手研究）24K16660、公益社団法人大林財団の 2022 年度助成、および文部科学省特色ある共同研究拠点の整備の推進事業 JPMXP0619217850（同志社大学赤ちゃん学研究センター）の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表する。

### 参考文献

佐藤将(2023) 東京都区部における母親の保育送迎を含んだ通勤行動の解明. 地理情報システム学会講演論文集 32, E7-05.

佐藤将・後藤寛(2019) 東京大都市圏における共働き子育て世帯の居住形態別にみた送迎および通勤行動. 都市計画論文集, 54(3), 1570-1575.

宮澤仁(1998) 東京都中野区における保育所へのアクセス可能性に関する時空間制約の分析. 地理学評論, 71A(12), 859-886.

# A23−5　子どもを中心とした保護者・地域社会・保育者育成の巻き込み型保育
## ―能登復興支援の夏祭り及び卒園児交流の場の事例を通して―

藤井　千里（金沢泉丘こども園）

**はじめに**

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』「第４章第３節２教育及び保育における活動に対する保護者の積極的な参加の解説」の中に、「教育及び保育における活動に対する保護者の積極的に参加することは、保護者自らが子育てを実践する力の向上にとって大変意義深いものがある。保護者の就労の有無に関係なく、保護者が園の行事や係活動等に参加しやすく、子どもと関わる楽しさを感じられるような配慮が求められる。（中略）保護者一人一人が園の関係者のみならず、園を拠点としながら広く地域の家庭や住民と温かなつながりを深めつつ、自ら子育てを実践する力の向上に結び付け、そのことが子育ての経験の継承につながるようにすることが重要である。」とある。

こども園が子どもの育ちを支えるコニュニティーの役割、つまり、地域における子育て支援拠点の役割を果たす必要がある。本論は、保護者、地域社会、保育者を巻き込んだ保育内容としての、2 つの行事に焦点を当てる。1 つ目は、保護者会主催の能登復興支援『夏祭り - 加賀能登をたっぷりあじわっちゃおう！』である。2024 年１月１日に起きた能登半島地震の復興支援を掲げて、石川県の伝統文化について子どもたちが知る機会となることをねらった。2 つ目は、小学校の夏休みに合わせて３日間開催する自由に遊びに来る卒園児交流の場『お楽しみ３days』である。2 つの行事を通して、在園児親子、卒園児、卒園児保護者、保育者の共同活動のあり方を考えてみたい。

**目的**

保護者や卒園児などを巻き込む行事２例を中心に巻き込まれる側の、保護者や卒園児の意見や感想を直接聞き取ることで、今後の『巻き込み型保育』の在り方について考察する。

**対象**

研究対象者は、K こども園の 2024 年７月６日に保護者会主催で開催された『夏祭り』、及び 2024 年７月 29、30、31 日の開催された『お楽しみ３days』に参加した保育教諭、保護者、卒園児、卒園児保護者である。

図１　夏祭り・お楽しみ３days

**方法**

期間：令和６年７月 30 日～8 月６日

内容：自由記述アンケート調査・インタビュー調査

テーマ：「子どもの育ちを支えるために、保護者や周りの方々を巻き込むこども園ですが、保護者会が中心になり、夏祭りなど様々な行事を開催した多忙な中で、保護者としてはどのような思いがあったのか、どのような思いが生まれたのかなど自由にお書きください。また、卒園児が自由に遊びに来る『お楽しみ３days』など、卒園後も繋がりをもっている思いについて」

回答者数：在園児保護者として、『夏祭り』を主催した保護者、お父さん CLUB 保護者４名及び、卒園した保護者会役員４名、保育教諭 13 名に自由記述アンケート調査を行った。また、両日参加の卒園児４名にはインタビュー調査を行った。

**結果**

⑴　在園児保護者の感想

①　子どもの年齢関係なく、保護者同士で、習い事や家庭での様子など、子どものことについて話したり、相談したり共有できる機会となった。

②　コロナ禍やデジタル化が進む中で、園の行事が face-to-face のコミュニケーションをとる機会となり、相手の声や表情が見える交流が深まった。

③　子どもが喜ぶ姿をイメージして、保護者が協力することで一体感が生まれた。

④　子どもにかっこいい姿を見せる機会となった。

⑤　保護者同士のつながりが生まれることが良いと思うことと、育児などで悩んでいる時も保護者を孤立させず、一人じゃない安心かが得られると感じる。

⑥　先生たちとの距離が近くなったことで、色々な相談、悩みを共有できる。

⑦　子育ての仲間が増えた。

⑧　何も知らない地域で、子育てをしていかなければならないといく時に、巻き込まれて良かった。

⑨　主催側の保護者とすると、保護者間の温度差が今後の課題と思います。

⑵　卒園後の保護者

①　主催する側になった時に、子どもたちの為に、みんなで作り上げる感覚があった。

②　子どもたち（親も）の、心の故郷の園、卒園しても開かれた園なので、親子共に受け入れてもらえる安心感と喜びがある。

③　保護者会役員をし、様々な社会経験や子育ての経験のある保護者と出会えたことで、自分の働

き方や子どもとの関わり方を考える機会となった。

④ お楽しみ 3days という素晴らしい企画があるからこそ、毎年子どもたちが楽しみにしているのですが、何よりもいつ行っても受け入れて下さる家族のような園の雰囲気が 1 番の巻き込み型保育の根本だと思います。

⑤ 園の中での子どもの様子を見る機会が増えてよかった。

⑥ 保護者目線と保育者目線は違うので、園の考え（大事にしていること、思い）を知ることができて、理解が深まった。

⑦ 保護者発信のアイディアを受け入れてもらえたことで、園内で保護者同士、子どもたちと過ごす時間がとても嬉しかった。

⑧ 自分の子ども以外の子どもと触れ合うことで、自分の子どもの良い部分に気付くことができた。

⑨ 子どもにとっても、親にとっても大切な時間を過ごした場所なので、機会があればこれからも関わっていきたい。

⑩ 卒園しても、子どもの心の拠りどころになっている。

⑪ お父さん CLUB に参加したことで、様々なお父さんに出会い、子育てに今まで以上に参加するようになった。

⑶ 卒園児の感想

① 違う学校に行った友達に会えることが嬉しい。

② 年上の友達に会えてとても嬉しかった。

③ とにかく楽しみにしていた。また来たい。

④ 小さい子どもと遊べるのが楽しい。毎日来たい。

⑤ 先生たちと会えるのが嬉しい。いっぱい話せた。

⑥ なんか、平和だなって思う。

⑦ 何だか懐かしい。変わったところもあるなって思った。

⑧ 給食が好きだった。とにかく、おやつが楽しみだった。

⑷ 保育教諭の感想

① 行事のテーマがあることで、子どもの育ちを支える、園と保護者の連携、一体感、団結力を感じた。（6 名）

② 卒園しても「お帰りなさい」と迎える場所があることを幸せに感じた。（6 名）

③ 継続的につながっていくことで、卒園後の子どもの居場所を作ってあげられると感じた。(6 名)

④ 保育者ではない、保護者の発想や考え、実行力に逆に学ぶことも多かった。（6 名）

⑤ 久しぶりに会った卒園児の成長を見られて嬉しく思い、保育教諭としてのやりがいを感じた。(6 名)

⑥ 在園児、卒園児の異年齢交流の中で、お互いの心が成長すると感じた。（5 名）

⑦ 小学生になってから小さい子どもやこども園の様子に触れることは、貴重な経験となり、在園児にとっても思い出に残る交流だと感じた。(2 名)

⑧ 保護者と園の信頼関係の深さを改めて感じた。これからも大切にしていきたい。（2 名）

⑨ 団結したコミュニティーがある環境は、子どもにも大きく影響する力があると思った。（1 名）

⑩ 学生、他団体が参加することで、垣根を超えた繋がりが生まれ、様々な可能性が生まれると感じた。（1 名）

⑪ 普段見えない保護者の子どもの関わりが見られた。（1 名）

⑫ 将来の保育者が増えるきっかけになると感じた。（1 名）

⑬ 保護者会の負担もちょっと大きいかと心配になった。

⑭ 今後は年齢を問わずに、相談会、親睦会、交流会などを通して、人が集まれる場となることは、子化が進む中で、需要が高まると考える。（1 名）

図２　　保護者アンケート例

**まとめ・考察**

約 10 年間、取り組んできた『巻き込み型保育』であるが、コロナ禍には、一旦オンライン開催になった。しかし、繋がりを断つことなく、共同活動として継続してきた。本研究のアンケート調査の結果を鑑みることで、『巻き込み型保育』の形が時間をかけて構築されてきたといえるであろう。特に今年度は、『夏祭り』のテーマが課題であった。被災地であることをどう捉え、子どもたちの心に残る行事にする為の検討が繰り返された。保護者会の強い思いやアイディアが出てくる中で、『巻き込み型保育』は、実は園側にとっても大きな影響を受けてお互いに育ちあうことが理解できた。さらに、『お楽しみ 3days』を継続的に開催することで、卒園後も保護者、卒園児が園に足を運んでくる関係性が生まれた。これは、卒園児が卒園後は地域住民という関係性にも繋がることを鑑み、こども園が地域のコミュニティーの拠点、子育ての拠点、卒園後の居場所としても役割が大きいと考える。

保育教諭のアンケート調査を行ったことで『巻き込み型保育』の重要性を理解し、園の特徴を共有できていることが分かったことも園長としても大きな収穫であった。

実践現場は、一日一日、一つ一つ積み重ねていく中で、園の文化が生まれる。今後は、職員と共にこの文化を共通理解し、将来に繋げていきたいと考える。子育て支援について保護者との信頼関係が基本にあってこその『巻き込み型保育』が実践できることと共に、今後も保護者支援が、サービス業務のように受け止められないように、さらに園側も一方的に支援をしているかのような錯覚に陥らないためにも、保育・教育の目的、内容と子どもの成長のプロセスを保護者と丁寧に共有し、子育てのパートナーとしての役割を果たしていく必要性を感じる。

参考　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　内閣府, 文部科学省, 厚生労働省　2018 p. 354 - p. 355

A23-6

# 遊びか練習か

## ―先史時代の考古遺物から考える子どもの模倣行為―

織田 将徳（金沢大学大学院人間社会環境研究科　博士前期課程）

### はじめに

現代において子どもの遊びは多様化しつつあるが、子どもの遊び場の一つとしてキッザニアやミニ・ミュンヘンのような大人の仕事を疑似体験できる場が存在する（花輪 2017）。また、おままごとやごっこ遊びも子どもの遊びとして存在する。これらの共通点は大人が社会生活に必要な仕事や振る舞いを遊びとして行っていることが挙げられる。カイヨワが遊びを四分類した中の一つにミミクリ（模擬・模倣）があるように模倣は重要な遊びである。先史時代において子どもたちは大人の「仕事」を模倣していたのか。本発表では考古学的な証拠である①石器・骨角器、②土器・土製品を基に、当時の大人の「仕事」といえる狩猟行為や道具作成に子どもたちが関わっていたのかを考察する。

### ①　石器・骨角器

ウルグアイの各地で 9000～8000BC に見られるフィッシュテイル・ポイントと呼ばれる尖頭器の一部では刃先が意図的に磨り減らされており、通常のサイズより小型に作られているものが確認されている。これは狩猟には全く使えないことから、狩猟ごっこのような子どもが遊ぶために使われていたようである（Nami 2013）。

イギリスの中石器時代（9300～8500BC）のスター・カー（Star Carr）遺跡ではシカの角を使ったヤス・銛状の骨角器（Barded Point）が多数見つかっており、一部では小さいサイズのものも見られることから子どもが練習や遊びとして小動物を狩るために作られたのではないかと考えられている。シカの角は地面に脱落しているため拾うだけでよく、狩猟と比べて肉体的な負担が少なく安全性も高く、視力も鋭い子どもに適した作業という見解もあり、子どもたちは骨角器で遊ぶだけでなく外の世界を探索しながら、原材料のシカの角を集めていた可能性がある（Elliott 2009）。

アメリカの先史時代（AD100～800）のパーティ（Par-Tee）遺跡ではクジラの骨から作られたアトラトル（投槍器）が出土している。いくつかのアトラトルは大人の手で握るには適さず、大きさからおそらく 8～10 歳程度の子どものために作られたと考えられている（図１）。アトラトルは習熟に時間がかかることから、子どもたちは若い頃から単に遊びというためでなく狩猟の練習としてアトラトルを大人に教わりながら使っていたことが示唆されている（Losey and Hull 2019）。

### ②　土器・土製品

土器・土製品は時代や地域によって多種多様なバリエーションが見られるが、人の手によって作られることは共通している。そしてその中には製作者の個人情報を復元できる指紋・指頭圧痕が残されている土器が見つかることがある。指紋の形状自体は生涯変わらないものの、指の大きさや指紋のシワ（隆起線）の幅は成長と共に変化する。土器や土製品に残った指紋・指頭圧痕のサンプルを集めることで、それらを残した当時の人物の年齢や性別をある程度推測することが可能となる。

中央ヨーロッパの新石器文化期（5700BC）のチェシェティツェ・キヨヴィツェ（Těšetice-Kyjovice）遺跡では、子どもが土器製作に携わったのではないかと思われるミニチュア土器が 6 点出土している。ミニチュア土器は大きさから貯蔵や調理には向いておらず、儀礼用に製作されたという考えが一般的である。しかし、チェシェティツェ・キヨヴィツェ遺跡のミニチュア土器（図２）に残された指頭圧痕や爪痕（爪形文）の大きさが当時の成人と比べて小さいことや、一部の壺では成人の指では内部が成形できないサイズに作られていることから、土器づくりを教わる子どもたちが練習として作った、あるいは大人の見よう見まねで遊びとして作ったのではないかと指摘されている（Kralik et al. 2008）。

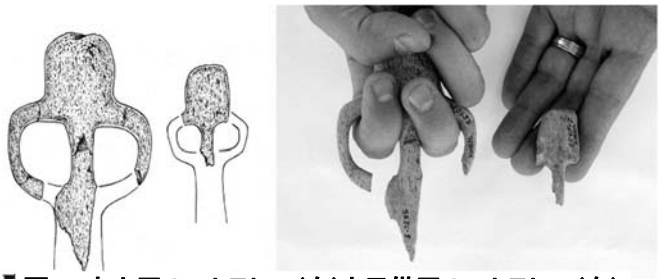


図１　大人用のアトラトル（左）と子供用のアトラトル（右）
（Milks et al. 2021, Fig. 3 より一部改変）

図 2 子供の指紋・指頭圧痕が残ったミニチュア土器
（Kralik et al. 2008, Fig.　2a より一部改変）

イランの銅石器時代(4500BC)のラハマタバード(Rahmatabad)遺跡では、子どもの指紋が外面に残ったミニチュアの鉢形土器が14点、円形紡錘車(図3)が2点見つかっている。ミニチュア鉢は通常の土器と比べて精緻な粘土ではなく、焼成温度も低温で粗雑な作りであった。紡錘車は通常と比べて表面の線刻が一部だけに施してあり、中央の孔も撚棒が入らないくらいの極めて細い孔が空けられている。(Bernbeck et al. 2020)

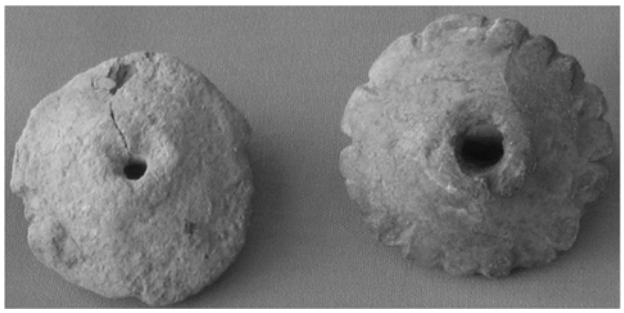


**図3 子ども(左)と大人(右)が作った紡錘車**
**(Bernbeck et al. 2020, Abb. 8より一部改変)**

また、シリアにあるハマ(Hama)遺跡でも土器に残った指紋から土器制作に携わった年代と性別を推定する研究がされており、初期青銅器時代(2500BC)のJ期に出土したミニチュア土器が7,8歳の年齢の子どもたちによって作られたと考えられている。更にハマ遺跡のJ期では、特定の型式の土器に残る指紋のサイズが9〜14歳の年齢に集中しており、労働者として土器の大量生産に従事していたのではないかと分析もされている(Sanders et al. 2023)。

## 結論

先史時代の子どもに関する考古遺物を紹介してきたが、これらが自発的な遊びなのか、それとも大人に教えられて練習したものなのかを判断するのは難しい。しかしながら、遊びは将来の生活への適応のための練習活動であるというグロースの考えに基づくと、遊びと練習は明確に分けることはできず、遊び要素が強いのか、練習要素が強いのかというスペクトラム的に捉える方が適切だろう。先史時代という厳しい生活環境の中で子どもたちが生き抜くための知恵や経験を身につけるために大人と子ども双方の関わりによって自然と成立したのが、遊びとも練習とも言えるこれらの模倣行為なのではないだろうか。

## おわりに

これまで考古学において子どもを対象とする研究は等閑視される傾向にあった。子どもの人骨、あるいは子どもに関係する考古学的資料が限られている他、大規模な社会的・経済的・政治的・宗教的な変化に子どもが関与することはなかったと考えられていたからである。しかし1980年代末になって考古学的証拠から子どもについて考える「Archaeology of Childhood」という考古学の一分野が誕生し、台頭しつつある。先史時代から近代まで様々な考古学的証拠から、子どもを取り巻く環境や子どもの世界観、あるいは「子ども」という概念そのものの定義について焦点を当てた研究が行われており、最近では『Childhood in the Past』という国際ジャーナルが2008年にTaylor & Francisから創刊された他、2018年には最新事例を紹介する入門書として『The Oxford Handbook of the Archaeology of Childhood』が出版されるなど成長著しい分野である。

日本でも、春成秀爾が縄文時代の子どもの遺物について取り上げ(春成1985)、山田康弘が子どもの埋葬事例や子どもに関する遺物を分析して縄文時代の子どもの社会的位置付けを試みている(山田1997,2014)が、人骨や埋葬属性の分析に集中しており、また研究も1980年代と比べたら増加しつつあるが依然として盛んとは言えない状況にある。

子どもを対象とする「Archaeology of Childhood」は、考古学の手法から「子ども」についての考えを提示できるため、単に考古学だけでなく他の近接分野にも重要な視点を提供することができる。日本でも「Archaeology of Childhood」の概念をいかにして定着させることが今後の課題となってくるだろう。

## 参考文献


花輪由樹 2017「遊びのスローライフ」.『家政学のじかん』編集委員会(編),『楽しもう家政学: あなたの生活に寄り添う身近な学問』59-66頁: 開隆堂出版

山田康弘 1997 「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』 第4号 日本考古学協会.

山田康弘 2014 『老人と子供の考古学』 吉川弘文館.

春成秀爾 1985 「子供の考古学」『歴博』 第10 国立歴史民俗博物館.

Bernbeck, R., Schönberg, J.L., Nashli, H.F., Röwer, J., 2020. Südiranische Kindheit um 4500 v. u. Z. Das Altertum 65, 185-202.

Elliott, B.J., 2009. Artefact biographies of the Star Carr barbed points. University of York.

Kralik, M., Urbanová, P., Hložek, M., 2008. Finger, Hand and Foot Imprints: The Evidence of Children on Archaeological Artifacts. pp. 1-15.

Lillehammer, G., 1989. A child is born. The child's world in an archaeological perspective. Norwegian Archaeological Review 22, 89-105. https://doi.org/10.1080/00293652.1989.9965496

Losey, R.J., Hull, E., 2019. Learning to use atlatls: equipment scaling and enskilment on the Oregon Coast. Antiquity 93, 1569-1585. https://doi.org/10.15184/aqy.2019.172

Milks, A., Lew-Levy, S., Lavi, N., Friesem, D.E., Reckin, R., 2021. Hunter-gatherer children in the past: An archaeological review. Journal of Anthropological Archaeology 64, 101369. https://doi.org/10.1016/j.jaa.2021.101369

Nami, H.G., 2013. Archaelogy, Paleoindian Research and Lithic Technology in the Middle Negro River, Central Uruguay. Archaeological Discovery 1, 1-22. https://doi.org/10.4236/ad.2013.11001

Polet, C., Martiarena, M.L., Villotte, S., Vercauteren, M., 2019. Throwing Activities Among Neolithic Populations from the Meuse River Basin (Belgium, 4500-2500 BC) with a Focus on Adolescents. Childhood in the Past 12, 81-95. https://doi.org/10.1080/17585716.2019.1638555

Sanders, A., Lumsden, S., Burchill, A.T., Mouamar, G., 2023. Transformations in the roles of men, women, and children in the ceramic industry at Early Bronze Age Hama, Syria and contemporary sites. Journal of Anthropological Archaeology 70, 101501. https://doi.org/10.1016/j.jaa.2023.101501

# A24-1 「星稜ジャンプ地域活動プロジェクト」による子ども対象のイベント企画
## —4年間の活動を振り返り—

天野佐知子（金沢星稜大学人間科学部）

### はじめに

「星稜ジャンプ地域活動プロジェクト」とは、通称「ちいプロ」と呼ばれ、金沢星稜大学における地域連携を要とした学生主体の団体の総称である。大学HPには「本学の教育研究の推進並びに地域の活性化を図ることを目的に、『地域に向き合い、地域に学ぶ』ことを通して地域課題解決と社会貢献に励む学生の自主的な団体に対し助成する制度」と説明されている。本学学生を対象に毎年募集が行われ、希望すれば誰でも申請ができる。プレゼン審査を経て採択されると、活動資金の一部が大学から支援され、1年間活動を行える。毎年およそ10前後の団体が活動しており、今年度は能登地域の支援活動を行う団体や保育現場でSDGsに取り組む団体など10団体が活動している。

筆者は2019年度から2022年度の4年間、「いしかわ子ども交流センター活性化プロジェクト」というちいプロの団体に顧問として携わった。なお2019年度はちいプロの前身である「SEIRYO JUMP PROJECT」での活動であった。

### 「いしかわ子ども交流センター活性化プロジェクト」の活動

「いしかわ子ども交流センター活性化プロジェクト」は、「子ども対象のイベントを通して、自分たちのスキルアップと交流センターの活性化を図る」ことをテーマに2019年度から2022年度の4年間活動を行った。「いしかわ子ども交流センター（旧石川県立児童会館）（以下、交流センター）」は、石川県金沢市に存在し、プラネタリウムや子どもの遊び場、製作室、音楽室などがあり、子どもがふらっと遊びに行ったり、休日に保護者と遊びに出かけたり、科学実験や子育て支援等の催しが開催されたりする、子どもと保護者が気軽に楽しんで利用できる施設である。

当団体結成前において、学生は交流センターから募集のあったイベントにボランティアとして参加するという関わり方をしてきた。ボランティアでも学ぶことは多かったが、職員に頼りきりで学生が主体的に動くことは難しい状況であった。そこで、交流センターに協力をいただきながら、学生自らがイベントを企画･運営することで、学生の主体性を養い、来館された子どもに楽しんでもらうと同時に、保護者の方々にも「親子間のコミュニケーションの場」を提供することを目標に当団体を結成した。

メンバーは金沢星稜大学人間科学部こども学科の学生を中心に、ゼミや学年、小学校教員志望者、保育者志望者を問わず、自主的に子どもを対象としたイベント企画を行いたいと希望する様々な学生が参加した。学生は、メンバー募集にはじまり、イベント内容の検討・準備、交流センターとの内容および日程の調整、宣伝、当日の運営等の活動を行った。

#### （1）2019年度の活動

初年度は2020年1月5日（日）に「U.うーんとS.新年A.遊びましょう」というタイトルで、製作やゲーム遊びが楽しめるイベントを1回開催した。当日は約200名の方に来館していただき、親子の交流と親睦の場として多くの方に楽しんでいただけた。

#### （2）2020年度の活動

2年目は2021年1月17日(日)に、「雪だるまに負けるな！謎解き大作戦！」と題し、雪だるまに関連したイベントを開催する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、実施直前に中止となった。しかし、学生たちのイベントを行いたいという願いや、イベントを心待ちにしてくれていた子どもたちの思いを鑑み、感染状況を踏まえつつ、交流センターと調整を行い、同年3月7日(日)にイベント名と内容の一部を変更して実施し、250名の方に参加いただいた。

#### （3）2021年度の活動

3年目は例年の1月のイベントに加え、12月に交流センター主催のイベントにも参加し、3つのコーナーを企画・運営した。また、2022年1月9日（日）に「せいりょうオリンピック」と企画し、オリンピックをテーマにクイズラリーや製作、ゲーム遊びなどを行った。125名の方に参加いただき、繰り返しゲームを楽しむお子さんや、親子で一緒にクイズの答えを考えるなど素敵な姿が多く見受けられた。

#### （4）2022年度の活動

4年目は2023年1月8日（日）に「わんぱくフェスティバル冬～せいりょうむかしあそび～」と企画し、だるま落としや絵馬づくりなどお正月にちなんだイベントを行った。メンバーが少ない中で協力して行った。

### 4年間の活動を振り返って

4年間の活動のほとんどはコロナ禍であり、学生は感染対策に気を付けながら準備や当日の運営を行った。2020年度は感染状況が悪化したために、イベントの中止を余儀なくされた。大変な中ではあったが、参加者からはこのようなイベントが減っている中で、開催してくれるのはありがたいという声が聞かれた。また4年間続けて行うことで、毎年参加してくださる方もおり、「いつもありがとう」「楽しみにしていたよ」などの声をかけてくださる方もいた。そのような声は大変嬉しく、学生たちの力となっていた。

### 引用・参考

金沢星稜大学ホームページ　https://www.seiryo-u.ac.jp/u/

いしかわ子ども交流センターホームページ　https://www.i-oyacomi.net/i-kodomo/

A24-2

# 活動報告：出張子ども食堂「カレー&ボドゲ会」
## ―他団体との連携を通した子どもの居場所づくり―

多橋 和輝（金沢大学大学院生※）

### はじめに

2000 年代以降、子どもの貧困に対する社会的関心が高まり、その対策として「子ども食堂」に注目が集まっている。子ども食堂とは、一般的に「子どもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」と定義される（湯浅、2017）。子ども食堂の開設に際しては、特別な許可は必要なく、面積基準やスタッフの配置基準などの制約もない。開設の敷居が低く、自分のやり方で運営できること、そして「食事」という誰もが安心できるテーマがあったことが普及につながったと考えられる（加納、2020）。事実、その数は年々増加しており、2023 年度現在、全国で 9,132 件の子ども食堂が活動している（むすびえ、2024）。

本稿では、筆者が約 2 年間運営に携わっている石川県金沢市の子ども食堂「スマイリーキッチンごはん」が、中高生の居場所支援を実施している団体と共催した、出張子ども食堂「カレー&ボドゲ会」の実践を紹介し、他団体との連携を通じた子どもの居場所づくりの成果と可能性を考察する。

### 子ども食堂「スマイリーキッチンごはん」

スマイリーキッチンごはんは、金沢市南部・野々市地区に位置する子ども食堂であり、2021 年 5 月に活動を開始した。当初、近隣に子ども食堂が存在せず、代表がかつて飲食店を営んでいた建物を利用し、仲間と共に活動を開始した。その後、同地区にはいくつかの子ども食堂が立ち上がったが、スマイリーキッチンごはんは本格的なキッチンや大型の冷蔵庫を備えていたことから、地域の子ども食堂の拠点としての機能も果たしている。

主な活動は、定例の弁当配布、夕食会、学習支援である。また、季節のイベントとして餅つきや花見会、クリスマス会も実施している。夏にはひとり親家庭の子どもを対象にサマーキャンプを実施し、長期休暇中には施設の開放を行うなど、拠点となる施設を活かし、多様な活動に取り組んでいる。利用者数は増加の一途を辿っており、現在の公式 LINE 登録者数は 700 人を超えている。

活動開始当初は新型コロナウイルスの影響で対面での子ども食堂の実施が困難であったが、5 類移行後の 2023 年 5 月より、対面での夕食会を実施している。弁当配布では利用者との会話が少なかったが、夕食会では最大 4 時間を過ごすことができるため、利用者との関係構築や居場所感の創出、ニーズの把握が可能となっている。また、かつて飲食店の「マスター」を務めていた代表によるカレーは評判が良く、子どもも大人もおかわりの列が絶えない。

夕食会の前後は自由時間としており、子どもたちは宿題をしたり、ボードゲームで遊んだりしている。しかし、子ども食堂に置いてあるボードゲームは、寄付されたものであるため、部品の不足や劣化が激しいものや、数年前に流行したもの、対象年齢が限られているものが多い。ボードゲームは長期休暇中の施設開放時にも利用されるため、皆で楽しめる新しいものを購入したいという思いが強まっていた。そんな中、我々のもとに出張子ども食堂の話がやってきた。

### 出張子ども食堂「カレー&ボドゲ会」

出張子ども食堂の話は、能登半島地震で被災された中高生を中心とした 10 代を対象に居場所づくり、学習支援などを行う「ユースのリビング」（主催：一般社団法人第３職員室）からであった。食に関するイベントを企画しており、子ども食堂の活動を行う我々に協力を依頼したとのことであった。

スマイリーキッチンごはんに声がかかった理由は、ユースのリビングスタッフと筆者が以前から繋がっていたためである。互いの活動について日頃から SNS などを通して情報共有を行っていたことで、今回のコラボレーションが実現した。当初は、子ども食堂からカレーを持っていくだけの企画であったが、筆者はユースのリビングに多数のボードゲームが用意されていることを知っていた。そこで、子ども食堂からカレーだけでなく、利用者の子どもたちも連れていき、実際に遊んでどのボードゲームが良いかを検討する「ボードゲーム検討会」を実施することを提案した。ユースのリビング側にも快諾してもらい、準備を進めることとなった。

図 1 出張子ども食堂

当日、朝 11 時に長土塀青少年交流センター（金沢市が設置する、青少年の交流と育成を目的とした施設）の調理室に子どもたちが集合した。4 人がけのテーブルには各団体から 2 名ずつ子どもたちが座った。子ども食堂を利用する子どもたちにとっては、年上の中学生や高校生と会話することは日常であったが、ユースのリビングを利用する子どもたちにとっては非日常の経験であったよ

※金沢大学大学院人間社会環境研究科地域創造学専攻教育支援開発学コース 2 年

うである。大学生ユースワーカー、大学生ボランティアが、配慮が必要そうなテーブルに入り、良い雰囲気づくりに努めた。

12 時、「いただきます」の合図で食事会が始まった。夕食会でいつも食べているカレーをユースのリビング利用者やスタッフにも食べてもらった。代表が「甘くて辛いのが特徴」と語った通り、野菜の甘みや肉の旨味、スパイスのピリッとした刺激を子どもも大人も楽しんでいた。多くの参加者がおかわりをし、食事を楽しんでいた。なお、食材の分担については、カレーとサラダをスマイリーキッチンごはんが、ご飯と飲み物をユースのリビングが用意した。

13 時、ユースのリビングが開催されている部屋に移動し、企画の趣旨を子どもたちに説明した。最後に楽しかったボードゲームを聞き、その意見をもとに子ども食堂でも新しいボードゲームを購入することを伝えた。趣旨を理解した子どもたちは、興味のあるものから順に、さまざまなボードゲームで遊び始めた。ユースのリビングの慣れた子どもたちがルールを説明してくれた点も、順調に進んだ要因の 1 つであろう。子ども食堂のスタッフもゲームに参加し、子どもも大人も楽しめるゲームがどのようなものであるか、子どもの様子を見ながら検討した。筆者を含め、スタッフが心から楽しめるゲームをいくつか見つけることができた

15 時、イベントが終了した。アンケートでは、今回のイベントに対する感想と、一番おもしろかったボードゲームについて記入してもらった。年齢によって好みが分かれるものもあれば、年代に関係なく楽しめるゲームもあることが判明した。

**図 2 ユースのリビングにて、**
**ボードゲームで遊ぶ子どもたち**

イベント終了後、スマイリーキッチンごはん代表のもとに、ボードゲームをいくつか持った常連の子どもが現れた。おもしろかったゲームについて、代表にその特徴とおもしろいと感じた理由を説明し、それらのゲームを購入してほしいと要望を伝える姿が見られた。子どもが自ら要望を運営者に伝える、興味深い瞬間であった。

## おわりに

出張子ども食堂「カレー&ボドゲ会」を開催した 2 週間後、子どもたちへのアンケート結果をもとに、スタッフでボードゲームの選定を行い、新たに 10 個のボードゲームを購入した。選定基準は「幅広い年齢層が一緒に楽しめること」であり、「幅広い年齢層」には大学生や大人も含まれている。種類については、瞬発力を要するものから、思考力を要するものまで、さまざまなゲームを用意した。

購入したボードゲームは現在、夕食会前後の自由時間や夏休みの施設開放時に子どもたちが利用している。小学生から大人まで一緒に遊ぶ姿が見られ、目的は達成されたと感じている。夕食会後のスタッフミーティング終了後には、大学生スタッフが残って遊んでいる姿も見られ、スタッフ間の交流ツールとしても活用されている。

**図 3 スマイリーキッチンごはんにて、**
**ボードゲームで遊ぶ子どもたち**

今回の出張子ども食堂は、筆者がユースのリビング主催者との繋がりを持っていたことで実現したものである。互いの活動を知っていたからこそ、アイデアが浮かんだタイミングで声をかけ、互いの強みを活かし合い、双方にとって有益な活動を実現することができた。子ども支援を行う団体同士が連携することの価値を再認識できる実践であった。

食事もボードゲームも、皆で同じ時間を楽しむことのできるツールと捉えられる。また、いずれも準備が比較的容易である。子どもの居場所づくりの課題として、一部の地域の子どもたちしか参加できない点が挙げられるが、今後は「食事とボードゲーム」をパッケージとしてさまざまな場所で実施することで、アクセシビリティの課題を克服できるだろう。公民館や児童館など、地域に立地する公共施設を活用し、同様の実践が広がっていくことを期待する。

さらに、今回はボードゲームという備品購入のプロセスに子どもの声を反映させることができた。日常の比較的聞きやすいテーマで子どもの声を聞く取り組みを重ねることで、緊急時に助けを求めることのできる関係性を築いていくことができるだろう。「アクセシビリティ」と「子どもの声を聴くこと」という、子どもの権利の視点から今回の実践を評価し、これからの活動に繋げていくことを、今後の課題としたい。

**参考文献**


1. 湯浅誠(2017)「『なんとかする』子どもの貧困」角川新書、77 頁
2. 加納史章(2020)「子ども食堂における成果の一考察—振り返りから教員養成課程の学生が得たもの—」兵庫教育大学研究紀要第 57 巻、28 頁
3. 認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ(2024)「こども食堂全国箇所数調査 2023 結果（確定値）のポイント」、https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2024/02/Siryou_1_Kakuteichi_2023.pdf（最終閲覧：2024 年 8 月 16 日）

A24-3

# 地域住民と子どものためのアート空間プロジェクト
## —遊楽ソウの可能性 —

池上　奬（　STONE ARTIST　　金沢星稜大学非常勤講師）

### 目的など

アートは人々の創造性を刺激し、心の豊かさを育む力を持っている。しかし、現代社会には、アートに触れる機会が限られているため、地域住民と子どもたちが気軽にアートに触れられる環境の提供が求められている。本研究目的は、地域住民と子どもたちがアートに気軽に触れられる場所「遊楽ソウ」を創設して、その影響を評価することを目的とする。

### 「遊楽ソウ」について

このアートスペースは、金沢市幸町の町屋に2023年に創設した。遊ぶ、楽しむ、を基本理念に置き、ソウは、創造する、想像する、想う、装う、奏でる、荘（過ごす）、など、参加者が自由に意味を選択できる余地をもって名付けている。

現在１階は、筆者のストーン・アート作品に触れられるスペースとして地域住民に開放して、２階を筆者の工房として使っている。これまで、保育者たちの集まりの会、学生らのミーティング、町内の打ち合わせ、作品の買い付けなどに利用されている。地域住民と保育者らの能登半島地震復興学習会で使用した保育者らからは、「普通なら美術館でかしこまって見るような作品に囲まれて学習会や指圧体験会ができて、心が落ち着く」、「金沢の古い町並みにあったストーンアートに触れられて得した気分である」などの感想が寄せられている。

地域住民と保育者らの能登半島地震復興学習会の様子

（写真1.2）地域住民と保育者らの能登半島地震復興学習会の様子

### ストーン・アートについて

筆者の作品は、実際に見てもらうことが一番であるが、本要旨では、以下を紹介する。

「このエレガントな彫刻は池上奬氏によるものである。その量感は力強く空間を埋め、基礎は安定感を外観は完全性を意味し、不完全さと不規則な細部は自然への情景を誘う。私たちの眼前にあらわれた自然の片鱗のようである。（後略）」

（元フィレンツェ大学　ピエールジャコモ・ペトリオーリ博士より）

### 「折石技法」

筆者のストーンアートの代表的な作り方は「折石技法」である。この技法は一度、石を　折って改めて繋ぎ合わせる事で新たな石の表情が生まれるというものである。非常に時間と体力のかかる作業であるが、石の特性を生かした技法である。アートの世界でも非常に珍しい技法であり、この技術を持ったアーティストに出会った事は無いと自負している。

（写真３）2024年7月13日～24日

金沢市Gallery ミュゼでの個展。

作品を説明する筆者

### 環境としての「遊楽ソウ」の現段階

本プロジェクトは、現在以下の段階にある。隣の空家の庭を地域住民と子ども達のために開放、庭作りを行っている。地元のコミュニティの活性化を図る為、ベンチや野菜作りなどが進行中である。

また、地元住民（古くからの住民、新しい住民、「造形作家、映画プロデューサー、古着ファションデザイナー等」）との話合いを行い、住民のニーズの把握や反応調査の準備中である。筆者のこれまでの教育業績も生かしながら、住民と子ども向けのアート体験活動の場造りや、これまでに「遊楽ソウ」で出会った関係機関と協力するイベントの開催を予定している。

### おわりに

私達の生活空間の中に一つアートを置く事によって、日常の楽しみが幾重にも増えると思われます。
楽しいアートの環境空間を創造出来るインテリア、エクステリアを考え、更なるアートの領域を広げたいと思います。この様な魅力あるアートの在り方を追求し遊び、楽しみソウゾウしたいと思う所存であります。

「遊楽ソウ」の活用方法を「こども環境学会」於いて出会った人達と共に考えて行ければ、と思います。

A24-4

# 外で遊んで大きくなるということ再考

## ―遊び環境生活環境におけるアロングサイダーの存在を核として―

菊地知子（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所研究協力員）

## Reconsideration of playing outside and children’s growth

## ―Focusing on importance of “alongsiders”s presence as living environment―

**報告の背景と目的**

筆者は、2013年度（2013年４月～2014年３月）に、M学童クラブに月１～２回を訪れ、子どもたちと遊んだり指導員のお話を聞かせてもらったりしていた。M学童クラブは福島市の中心部から5.5キロほど南方の、田畑やそのあぜ道や水路の広がるのどかな地に位置しており、近隣３つの小学校の子どもたちが通っている。2013年当時、遠足など行事にのみ参加する５年生はいたが、学童クラブに日常的に通っていた最年長は４年生。その４年生たちは、東日本大震災と原発事故前の学童クラブでの生活を知る数少ない存在であったため、彼らが小学校そして学童クラブを巣立つ前に、私たちが知っておくべきことや共有させてもらっておくべきことを教えてもらっておきたいと感じていた。そして、2016年２月に東京・大妻女子大学で行われた第一回こども環境学セミナーにおいて、座長のご厚意もあって中学校入学を目前にしたＳくんにも登壇してもらい、「外で遊んで大きくなる、ということ　福島市M学童クラブに通う子どもたちの５年間」という演題で活動報告を行った。

今回の報告にあたり、改めて現地を訪れ、元保護者、元児童、元児童で７月までアルバイトをしていた高校生、現職員にお話を伺った。その中で改めて、Yさんを好例とした存在、すなわち、職員でもない、保護者でもない第三者的大人が居ることの意味の大きさを思った。Yさん的な在り方に、思わず知らずalongside＝～のそばに、～と並んで、一緒に）という語が想起され、alongsideする者としてのalongsiderという語を着想するに至った。既にどこかで使われていることがある語であるかもしれないが、本稿執筆時点では、少なくとも日本語使用圏で取り上げられている例は見当たらず、英語使用圏において、キリスト教関連のサイトで散見されるに留まっている。本稿においては、内側に所属する者、insiderでも、外側にいる部外者、無関係な者、outsiderでもない、第三者的立場でありつつ見守り場や時間を一部共有する同行者という独自の意味合いで、“言うならば”alongsiderと定義して使用することとしたい。

**アロングサイダー（alongsider）＝良き同行者という視点から考える人的環境**

2011年3 月からの学童クラブの日々の遊びや生活の様子、子どもたちの気持ち、学童職員と保護者、保護者同士、職員と子ども、保護者と子どもとのかかわりあいを、主には保護者から、保護者の視点で語り聞かせてもらい、共に考えさせてもらった。それを元手に、改めて子どもたちの遊びや生活の環境について考えた時、これまであくまでも背景に退いていたalomgsiderの存在に焦点が当たるに至った。以下、過去に保護者から提供された記述や筆者の覚書の中から取り出し再確認する。

◆2013年11 月：震災前に子どもたちが楽しみにしていたＹおじいちゃんおばあちゃん（大家さんご夫妻）の「焼き芋屋さん」が復活しました！

◆2014年12月：事故後三年八か月ぶりに(大家さんの私有地である)牧草地で遊びました。今まであまり外に出て行かなかった子どもも喜んで行くようになりました。サッカー、野球、鬼ごっこなどのいつもやっている遊びの他に花摘みやＹさんが刈り取った草を高く積み上げたりして遊んでいます。手洗いうがいの約束はみんな守っています。土曜日には秘密基地作りもしました。遊んだ後に、いつもサッカーをする蔵の前を通ったときに、「この場所ってこんなに狭かったっけ？」と感じるほど牧草地は広いです。

◆2016 年冬

外と室内に各一人指導員がいれば 15：30 から外遊びが可能になっている。冬期間は 16:30 まで、夏季は 17:30 まで。裏の原っぱで遊ぶことも可能になりＹさんが、テニス用のネット、バスケットゴール、サッカーゴールなどを手作りで設置してくれるのだという。Ｓくんいわく「子どもたちで流行っている遊びに関するものがいつの間にか出来ている」とのこと。子どもたちを見守り、大切にしてくれている人の存在を実感する。

そして以下に、今夏新たに聞き得たことを記載する時。

◆2024年夏

かつて30名ほどだった登録児童数が43名にまで増えていた。送迎時、車が行き違えない幅の駐車スペースに車が混雑することが懸案だったが、大家のＹさんが駐車スペース用に敷地の隣りの土地を新たに購入。整地されたその場所は駐車スペースであるのと同時に、子どもたちが野球に興じる格好の場にもなったが、ボールが他家の所有地に飛んでいってお叱りの対象になることを極力避けるため、Ｙさん自らバックネットを手作りしてくれた。別の角度にも飛ぶとなれば、そこにも新たにバックネットが作られる。御年90を超えたＹさんの逞しさと優しさを感じずにはいられない。

またある時、ボール遊びをしていて敷地脇の通路（私道）の向こう側へ転がっていったボールを追いかけて通路を渡ろうとした際にその通路の所有者である方から結構な勢いで「勝手に入るな」と一喝されたことがあった。その時に畑仕事で外に出ていたＹさんがその私道の

先の公共の場に行くためにここを通ることは集落の昔に念書が交わされていることに言及、子どもが外で遊ぶ姿や声にそのたび声を荒げる無理解への諫言をしてくださったという。その姿に、子どもとボールを追いかけて私道に入った高校三年生（かつて学童クラブに通っていて毎週土曜日に学童のお手伝いをしていたは、感激で涙が止まらなかったという。

施設や敷地の提供（貸与）、物理的な環境整備に留まらず、ご近所からのお叱りや理不尽な物言いに対して庇い立てをしてくれる第三者の存在が、子どもたちの自由で闊達な生活のためにいかにありがたいものであるか、改めてうかがい知ることのできるエピソードであった。

**まとめ**

今回、たとえ自然環境と言えども人とのつながりによって子どもの生活における外遊びを位置づけ価値づける、ということを改めて実感し、教師や保育士、保護者といったinsideに位置するのでも、部外者としてoutsideに位置づくのでもない、alongsiderという立ち位置・存在の重要性について言及した。震災前、震災当時、そして現在に至るまで、M学童クラブの家主であるＹさんの存在が多方面で大きいことが、驚きすら持って改めて感じられる、

筆者自らの経験からも、また、過去と今夏の訪問からも、生き生きと外で遊ぶ子どもたちの姿、あるいは、あたりまえに外で遊びたい/遊ばせたい、とさりげなく願う姿に、子ども時代の十分な外遊びが、その人のその後の人生を「その人のものとして生きようとすること」の土台を作り、支えるように思う。改めて、子どもの身体は、人為的な権利や義務としてでなく、自然として、つまりみずから、おのずから、育ちたがっている。風や空や草木や泥のよびかけに応答したがっている。子どもたちの、そしてたぶん私たちのからだは動きたがっているし、遊びたがっているし、学びたがっている。そんな風に“聞こえてくる”ように思えてならない。

前回発表からの８年弱で、私たちはコロナ禍を経て、屋外はおろか室内であってもワラワラと集ってくんずほぐれつ、また、大きく声を出し合って騒がしく、遊ぶ経験の希薄な幼少期を送った子どもたちが学齢となっていること、さらには、外に出ることが不可能なほどの酷暑や、自然豊かな中ではあれ、至近の舗装道路が抜け道となってかなりのスピードを出して走る車が以前にもまして増えたこと等、M学童クラブの外遊びを容易でなくする要素は増していることを感じる。それらについてはまた別途論考しなくてはならないと思いつつ、ここでは、子どもの遊び環境、生活環境におけるalongsiderの存在の意義と大きさを主として報告してきた。

2016年2月の発表に際し、筆者は、梗概を以下のように結んだ。「Ｓ君らの学童クラブでの生活は、時間的空間的に限られた「外遊びの時間」なるものが存在しないほど、かつては外遊びで占められていた。すぐそこにある土や水や風、陽の光への呼応、あるいはそれらとの対話の中でこそ子どもたちは自らの生活をその人らしく生きることへの安心感を蓄えてきた。この五年間、この国ではしばしば「安全」が連呼されてきた。しかし、皮肉なことに、「安全」の連呼によって一人びとりが内面に「安心」を積み重ねることはついぞなかったように思う。原発事故後、かつての身体記憶に支えられて自ら渇望し、欲求し、話し合って実現させてきた「外で遊ぶという体験」の充足感・充実感とその思いを受けとめられる経験ほどには、「うん。大丈夫。」という実感＝安心を重ねることにつながることは他にはなかった。

Ｓ君は小学校卒業とともに学童クラブでの生活を終えるが、Ｓ君らのここまでの思い・葛藤や切なさが、忘れ去られることがあってはならないと思う。
同時に、「僕たちは外で遊びたいんだ」「外で遊んで大きくなりたいんだ」という〝当たり前の願い〟とそれを〝聞かせてほしいと願われる経験〟とが下級生たちに引き継がれ、「うん、大丈夫」という実感＝安心をしっかりと重ねて大きくなっていってほしい。そして私たちは、子どもたちの笑い声、仲間を呼びあう声が野に山に響き渡るために、子どもたちの思いを、聞かせてほしいと願い続けなければ、と改めて思う。」

子どもにとっての大人とのつながりが、いわゆる“先生”的な教育者保育者指導者、あるいは主には血縁関係にある親の大きく２パターンに収斂されがちな中、Ｙさんという存在を通して、alomgsiderという在り方に注目してみた。しかしながら、Ｙさん一個人の存在のみをもってalongsideをまたalomgsiderを語ろうとしてはいけない、とも思う。筆者自身が、また、社会を構成する大人である私たち自身が、どのような形でalongsiderであろうとし、alongsidenessを涵養していくことが良いのか、涵養しうるのか、まだまだ考察の余地が大きく残されていることを深く感じる。

A24-5

# 子どもの可能性を育てるSTEAMプログラミング教育

## ―幼児教育におけるプログラミング教育の必要性と可能性―

細谷　貴章　（株式会社ワンダーアカデミア）

**要旨**

幼児教育におけるプログラミング教育は、“プログラミング技能の習得”を目的とする教育ではなく、“STEAM教育の手段としての教育”であると意味づけ、STEAMプログラミング教育と呼ぶ。STEAMプログラミング教育は、幼児期における教育全体の可能性を広げるものであると考えている。幼児期の成長に合わせた教育として、“今までの教育を一新するもの”ではなく、“今までの教育環境をより良くするもの”として、適切にICTを活用してプログラミング教育を行う方法について探究している。本論では５歳児の姿から考察する。

**はじめに**

プログラミング教育は２０２０年度に小学校、２０２１年度に中学校、２０２２年度に高等学校と、それぞれ必修化されている。また、２０２５年度からは大学入学共通テストに「情報」科目として採用され、社会的にも重要性の高いものとなってきている。小学校では入学と同時にタブレットが配布され、各授業でのツールとして利用されている。授業にオンラインで参加したり、宿題等の提出物をWebで提出したり、地球儀や虫眼鏡等の道具の代替品としての活用など、多岐にわたって利用されている。

幼児教育においても、プログラミング教育を取り入れることによって、現在の教育の可能性を広げることができるのではないかと考える。さらに、幼児教育であるからこその必要性と可能性にも期待する。

幼児教育におけるプログラミング教育の必要性は、保育所保育指針の『１０の姿』[1]の視点から分析する。

**目的**

幼児教育におけるプログラミング教育の必要性と可能性について考察することを目的とする。

**対象**

弊社のプログラミング教育を導入している、保育施設を対象として考える。なお、写真および情報の使用に関して許可を得ている。

**方法**

プログラミング教育を行うツールとして、５歳児に対して言語の障害を取り払うため、ビジュアルプログラミングである「Springin’Calssroom」を活用して行う。教材については、弊社の専門スタッフや専門家、過去の事業による経験やノウハウをベースとして独自で開発を行い提供する。

提供方法は、講師が前に立ち授業を行う「教室型」にてプログラミング教育を行う。１回３０分程度とし、全体の１５～２０分程度をテーマに沿った学習、残り１０分程度を自由制作時間とする。人数は１５名ごととし、活動については４名以下のグループで分かれて行う。１５名ごととすることで、児童全体の理解度を把握し、活動を円滑に行うためである。また、４名以下のグループとすることで、講師および補助の先生が対応しやすくするとともに、テーブル内でのコミュニケーションの促進が狙いである。

**図1　保育活動における活動風景（エンジェル保育園様）**

**配慮等**

プログラミング教育のツールである「Springin’Classroom」は４０個のアイコンと呼ばれるプログラムの組み合わせで表現を行うツールである。

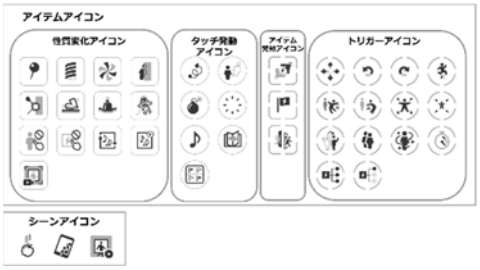



**図2　Springin’Classroomのプログラム一覧**

使用するデバイスはタブレットであり、ツールの直感的な使いやすい仕様に加えて、タブレットでの学習により、５歳児でも抵抗感が少なく取り組む姿勢を持たせやすい。また、特徴の一つとして、登場するイラストは子どもたち自身が描いて作成するため、絵を描くこと自体に楽しみや関心を持たせやすい。

**図3 タブレットでの活動風景**

教材はツールをベースとして弊社での独自開発を行ったものを利用し、パワーポイントのスライド５～１０枚程度で用意する。

教材についても、視覚のみでも理解できるように心がけて作成する。講師による説明は最低限とし、子どもたちが主体的に取り組みやすいものを意識する。また、子どもたちの創造の余地を持たせるために、あえて未完成であったり、想像を膨らませやすいイラストを提示する。

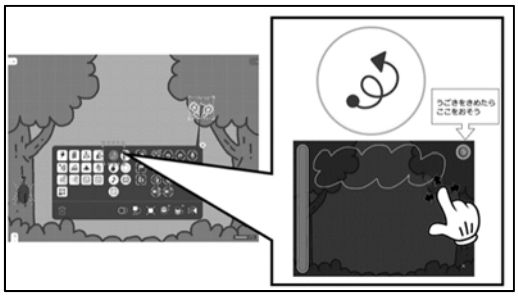



**図4 教材パワーポイントのイメージ**

## 結果

結果は以下の３つである。

**1. ５歳児のプログラミング学習は可能。**

まず、５歳児でのプログラミング学習は可能であるということがわかった。例えば、タブレットの操作時に手で画面を押さえながら操作すると、押さえている手が反応してしまう。それを理解し、タブレットを操作する際には画面に触れないように気をつけて四角を押さえながら操作をするようになった。これには子ども自身が原因を考える姿や子ども同士で教え合う姿があった。

**2. 友だちと一緒にタブレットに触れることで、意欲的な活動へと変化。**

導入初期はタブレットに対して不安を持つ姿もあったが、友だちと一緒に触れることで、漠然とした不安が減り、意欲的に楽しんで取り組む姿へと変化した。

**3. コミュニケーションが苦手な子どもが率先してコミュニケーションをとるようになった。**

文字を使わないツールであることで、タブレットに描かれたもの（動き）だけで表現を行う。これをグループワークで行うことで、自然と友だちの作品が視野に入り、その結果友だちの作品を通じて、友だち自身にも興味が湧いてコミュニケーションをとるに至った。さらには、コミュニケーションが苦手な子に対して作品の話題から声をかける姿が見られた。

## 考察

近年では、タブレットやスマートフォンを子どもに与える家庭が少なくないが、無作為に与えることによるモラル意識の低下が危惧されている。しかし、同年代同士で使い方を一緒に考えながら取り組む姿勢、先生に純粋に尋ねる姿などの、主体的かつ共同で取り組む姿から、幼児期から段階的に IT 機器に触れることで、IT 機器に対する正しく向き合うことができると感じた。

さらに、教材や活動に子どもたちの創造の余白等の配慮を行った結果、プログラミング教育での一般的な「論理的思考」「創造力」といったものにとどまることなく、保育所保育指針にある幼児期に目指す『１０の姿』のほぼ全てに関わる結果となり、幼児教育に対して横断的な学習となると感じた。中でも特に驚いたのが、日常的にコミュニケーションを苦手とする児童のコミュニケーションのきっかけとなったことである。表現の幅が広がったことにより、自分らしさを表現しずらかった子どもたちが表現できるようになり、それを見聞きする環境によって、コミュニケーションが生まれやすくなった。幼少期は特にボキャブラリーも乏しく、言葉だけでは補いきれない部分を表現でカバーすることで、伝えることができるようになりスムーズなコミュニケーションへと繋がったのだと考える。

## おわりに

プログラミング教育は現在の幼児教育の弊害となる可能性もあるが、その提供方法によっては子どもたちの活動に良い影響を与える可能性の高いものである。これは建築やデザインの分野で使われる、空間のデザインや配置が持つコミュニケーション効果『空間コミュニケーション』にヒントが隠されていると考え探究を行っていく。

さらに、今後は小学校教員、保育者、教育者、保育者を目指す学生への教育を進めていきたい。

[1] 厚生労働省告示第 117 号「保育所保育指針」フレーベル館 p11

# 農の風景と食の味わい、子どもで賑わう山村古民家にて

A24-6

富樫豊（北陸こども環境研究会）

**1. はじめに**　富山県大岩にある山村の古民家が2012年に一般公開されたのｱﾆﾒ「おおかみこどもの雨と雪」の舞台ﾓﾃﾞﾙと周知されてからは、当該古民家及びその周辺景を守り保全しようと、地元民を含め全国のｱﾆﾒﾌｧﾝが結集して2014年からはNPO組織とした活動により、今では年間1万人を超えるほどの賑わいが定着している。この間、NPOでは、来場者に映画の世界をﾘｱﾙに堪能できるよう、古民家や周辺景の保全に尽力している。具体的には、古民家がｱﾆﾒ主人公の暮らしが営まれてるかのように設えをし、来訪者が何の気負いもなく(ｱﾆﾒで熟知している)我が家のｲﾒｰｼﾞを醸し出してもいる。著者は、こうした古民家での来場者の我住まいの堪能について合同ｾﾐﾅｰにて報告した。すなわち、2015年には古民家利用、2019年には来場者の古民家での過ごし方、を扱った。

今回は、ｱﾆﾒｽﾄｰﾘの根幹をなす「大自然の中での農を中心とした営み」について、来場者が思い思いに堪能して様子を報告したい。

**2. 大自然の中での愛情物語の核となる農**　ｱﾆﾒは、狼と人間との間に生まれた幼い子ども(雨と雪)が大自然の中で母親の愛情のもと逞しく成長して物語である。その過程においては、一家の食を支えている畑が古民家に隣接し、地元長老のｱﾄﾞﾊﾞｲｽや指導のもとｼﾞｬｶﾞｲﾓづくりのｼｰﾝやご近所さんとのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝに華を咲かせていた。

そこでﾘｱﾙの場合も、来場者向けに映画の世界を現実世界とﾀﾞﾌﾞらせながら楽む行為として畑における農体験をさりげなく行っている。対象となる作物はｱﾆﾒに併せてｼﾞｬｶﾞｲﾓであり、春に種づけし、秋に収穫する息の長い体験であ。もっとも、どちらか一方の来場者も多い。最近は、収穫前に猿やｲﾉｼｼに食い荒らされる被害に見舞われており、皆さんを落胆させている。防護柵や何やらの対策をかいくぐってくる彼らに実はお手上げである。

とにもかくにも、来場者の楽しみ方としては、農家(古民家)の居住を体感し、農作業を楽しみ、自然の恵みを味わうことであり、自然と人間が一体となって営む生活を喜びとともに楽しむことである。しかも、来訪者同士も会話がはずみ、何か大家族のつながりを感じさせるかのような雰囲気も楽しむことができる。よって、ﾘﾋﾟｰﾀｰの方々も多く、(余談ながら)ここで婚約披露したり、新婚旅行をここにしたり、はたまたここを古里にしたりという、自然発生的な人生絵巻模様もつくられている。

なお、中山間の活性化として農を取り入れているところが多いが、ここでは中山間の環境保全を念頭に置くからこそ皆が楽しめるものであると主張する。

**3. 農を楽しむ大人と子ども**　来訪者が農を楽しんでいる様を二点紹介する。第一点として、来訪者が畑を耕したり、収穫の際には土と戯れ楽しんでいる(写2上中)。作業が終われば、谷川の水で手を洗ったり足を洗ったり。また一服するときは(農の)家でのんびりとし、縁側にいると農の香りで満ち満ちている。

第二点として、来訪者が(農の)家でこれまた自然の優しさのもとで農作物を食しています。夏に(写1下)皆でｽｲｶを食した時、最近の未就学児の子どもは、ｶｯﾄﾌﾙｰﾂに慣れ親しんでいるせいか果物の全体の形を意識することなく、また種の始末に困りがちであるが、年長の子供が年少の子供に手本を示しているかのように、種の吐き出し方を教えるなど、人間らしいつながりが自然と生まれている。

農とは、やはり住まいと人と自然を繋ぐのである。そんな農に人が愛してやまないといえる。「農は生活の営みそのものであり、そこには人、家、自然あり、(自然の恵みとして) 農作物が人と自然を繋いでいます」ということだからこそ、子どもが健全に育つのであるといえ、大人はそんな環境づくりに精を出したいものである。最後に一言、古民家にて来訪者どうし意気投合し、農の話が場を終始和ませてもいる。

写1　上；耕し　中；収穫　下；ｽｲｶ食

**4. おわりに**　本稿では中山間の民家および周辺景の保全活動として農と食に着目した実践を紹介した。**謝辞**；NPOの山崎正美氏、川端英徳氏に謝意を表します

Agricultural Scenery and Food Flavors in Old House Bustling with Children

TOGASHI　Yutaka

# Ⅲ　公開講演会

## 1. 概要

開催日時:　2024 年 9 月 7 日(土)15:30-17:00

開催場所:　金沢星稜大学 A 館　A21 教室

タイトル:　ボルネオの熱帯雨林と私たちのくらし

「食べ物、衣服、日用品。私たちのくらしは遠い国の生き物、自然、資源に支えられています。私たちのくらしが遠い国の自然とどのようにつながっているのか、また私たちには何ができるか、ボルネオの森を取り上げてわかりやすくお伝えしようと思います！」

## 2. 講演者プロフィール

中西宣夫　氏(サラヤ株式会社)

大阪市生まれ。同志社大学卒業、大阪大学人間科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。 2000 年 7 月より 2003 年 8 月まで、公益社団法人日本国際民間協力会のプロジェクト・マネージャーとしてヨルダン・ハシミテ王国に駐在。2004 年 11 月よりサラヤ㈱研究調査員としてマレーシア国サバ州でのアブラヤシプランテーションと生物多様性保全のためのフィールド調査を行う。 2007 年、認定 NPO 法人ボルネオ保全トラスト・ジャパンの設立に携わり、現在は同団体の理事も務める。

## Ⅳ　ワンコイン ・ワークショップツアー （こどもと楽しむ手作り活動）

### １. 概要

開催日時: ９月８日(日)9:30-12:00(受付開始 9:00)

開催場所: 金沢星稜大学 稲置記念館1F（受付場所）

### ２. 活動の内容

◯ガラスワーク
＊講師:佐藤 静恵さん(金沢星稜大学)
＊内容:廃ビンを利用したガラスのペーパーウェイト作り
＊メッセージ:
材料(廃ビンと牛乳パック)をご持参ください。完成品は後日取りに来られるか、着払い郵送となります。

◯おさかなワーク
＊講師:橋本 靖司さん(ヤマハ水産株式会社)
＊内容:イワシの手開き
＊メッセージ:
おさかなに触れて、焼いて、食べましょう！必要な人はエプロンと三角巾をご持参ください。

◯まいペーすワーク
＊講師:金沢星稜大学 学生有志
・えほんのひろば　おきにいりのえほんをみつけてみよう♪
・かれ枝クラフト　かれえだで、すきなかたちをつくってね♪
・ミツロウラップ　かんきょうにやさしいらっぷをつくろう♪
・コケ玉づくり　じぶんだけのコケだまはどんなかたちかな♪

◯モビール作家のてんじ
＊作家:三崎 大地さん
・モビールには、たね、かじつ、はね、りゅうぼく、かいがらがついているよ♪

＊参加費 500 円(小学生以下無料)です、どなたでも参加いただけます(小学校低学年以下の参加は保護者同伴ください)。

# Ⅴ　資料

## 1. こども環境学会　合同セミナー（北陸・関西・東海）のお知らせ

本セミナーは、こどもを取り巻く環境に関心がある研究者や実践者が集い、研究発表や活動報告を行い、相互の交流を図ることを目的としています。本年は第 11 回として、「考えようこどもが触れる自然と環境」をテーマに北陸地区の金沢星稜大学で開催します。
合同セミナーでは、研究発表・活動報告の他に、講演、ワークショップ、情報交換会を行います。こども環境学会の会員やこども環境に関心をお持ちの方ならどなたでも参加いただけます。皆様には、ふるって参加いただきますとともに、研究発表・活動報告にも応募・発表いただきますようお願い申し上げます。

●開催日：2024 年 9 月 7 日(土)・8 日(日)
●会　場：金沢星稜大学 A 館 2 階
〒920-8620 石川県金沢市御所町丑 10 番地1
金沢星稜大学交通アクセス https://www.seiryo-u.ac.jp/u/outline/access.html
●参加資格：こども環境学会会員、こども環境に関心のある方
●内　容：
＜1 日目＞
・13:00-15:00・・・研究発表会（発表 12 分　質疑応答 3 分）
・15:30-17:00・・・公開講演会「ボルネオの熱帯雨林と私たちのくらし」
（講演者：中西宣夫氏（サラヤ株式会社））
・18:30-19:30・・・情報交換会
＜2 日目＞
・ 9:30-12:00・・・ワークショップツアー（こどもと楽しむ手づくり活動）
〇ガラスワーク（9:30-11:00）：廃ビンを利用したガラスのペーパーウェイト作り
➡参加希望者は、廃ビンと牛乳パックをご持参ください。
〇おさかなワーク（10:15-11:45）：イワシを手開きして焼いて食べる
➡参加希望者は、エプロンと三角巾をご持参ください。
〇まいペーすワーク
・えほんのひろば：お気に入りの絵本をみつける
・かれ枝クラフト：かれ枝で好きな形をつくる
・ミツロウラップ：環境にやさしいラップをつくる
・コケ玉づくり：自分だけのコケ玉をつくる
〇モビール作家のてんじ：種、果実、流木、貝殻などがついた作家のモビールを鑑賞する
＊時間の都合上、「ガラスワーク」と「おさかなワーク」はどちらかしか参加いただけません。
●参加費：
◎1 日目参加費：3000 円（当日 3500 円）、学生 2000 円
＊高校生以下・障害者手帳をお持ちの方，開催大学学生は無料
◎2 日目参加費： 500 円
＊ワークショップは小学生以下のこどもの参加費は無料
＊2日目のみの参加も可能です
◎1 日目の情報交換会 5000 円、学生 2500 円
●申込み：下記ホームページからお申し込みく ださい。
https://sites.google.com/view/kodomoseminar11th
●詳細なご案内はこちらからダウンロードをお願いします。
https://tinyurl.com/2a9by26h
＜主催：こども環境学会　第 11 回合同セミナー開催委員会＞
＜共催：公益社団法人こども環境学会、金沢星稜大学学会人間科学部会＞
＜後援：金沢市、金沢市教育委員会＞
＜問い合わせ：kodomosemina@gmail.com（合同セミナー編集委員会　永坂正夫）＞

# Ⅵ 運営組織

## 1. 開催委員会

| | | |
|---|---|---|
| 開催委員長 | 富樫　豊 | （北陸こども環境研究会・代表） |
| 副委員長 | 櫻木耕史 | （東海こども環境研究会・代表） |
| 副委員長 | 高木真人 | （こども環境研究会関西・代表） |

## 2. 実行委員会

| | | |
|---|---|---|
| 実行委員長 | 永坂正夫 | （金沢星稜大学人間科学部） |
| 副委員長 | 三好伸子 | （金沢星稜大学人間科学部） |
| 委員（会計） | 天野佐知子 | （金沢星稜大学人間科学部） |
| 委員（庶務） | 花輪由樹 | （金沢大学人間社会研究域） |
| 委員（庶務） | 佐藤　将 | （金沢星稜大学経済学部） |

## ３．編集委員会

| | | |
|---|---|---|
| 編集委員長 | 永坂正夫 | （金沢星稜大学人間科学部） |
| 副委員長 | 富樫　豊 | （北陸こども環境研究会・代表） |

## 4. 共催・後援・協力

| | |
|---|---|
| 共催 | こども環境学会第 11 回合同セミナー（北陸・関西・東海）開催委員会 |
| | 金沢星稜大学学会人間科学部会 |
| 後援 | 金沢市 |
| | 金沢市教育委員会 |
| 協力 | 学校法人稲置学園 |

こども環境学会第 11 回合同セミナー（北陸・関西・東海）研究発表・活動報告梗概集

| | |
|---|---|
| 発行日 | 2024 年 9 月 7 日 |
| 編集者 | 永坂正夫・富樫 豊 |
| 発行所 | こども環境学会第 11 回合同セミナー（北陸・関西・東海）研究発表・活動報告<br>梗概集編集委員会<br>〒920-8620 金沢氏御所町丑 10 番地 1 金沢星稜大学人間科学部 永坂研究室<br>kodomoseminar@gmail.com |